

The Kansai University Bulletin

# 關西大學學報

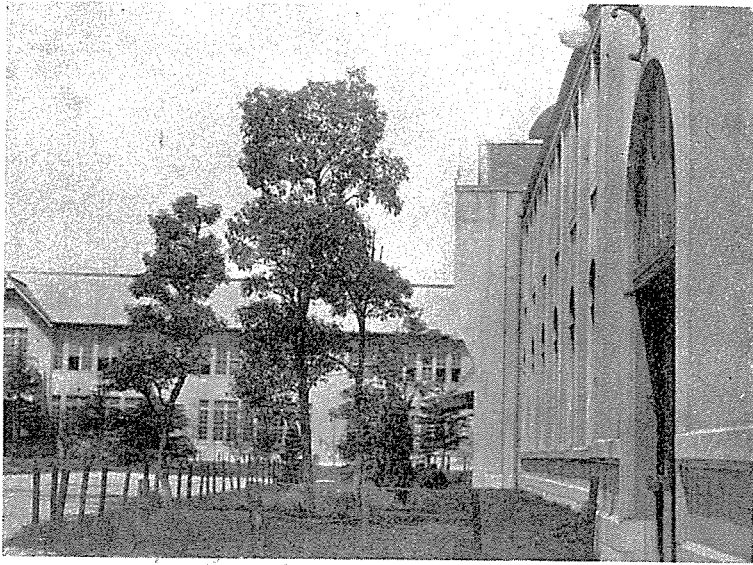
昭和七年 第九十九號 五月十五日發行



What hour shall Fate in all the future find,  
Or what delights, ever to equal these:  
Only to taste the warmth, the light, the wind,  
Only to be alive, and feel that life is sweet?

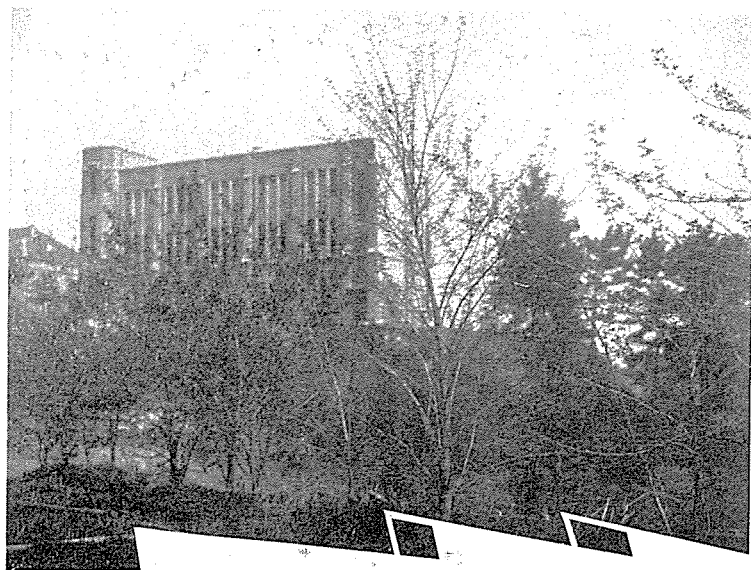
— *Lawrence Binyon*

關西大學學報局



新  
緑  
の  
五  
月

千里山學舎所見



(上) 千里山學舎グラウンドとクラブ・ハウス  
 (中) 本館と大學豫科教室  
 (下) 圖書館

# 關西大學學報 第九十九號

## 目次

英國海外貿易の衰退……………	(四)
講師 中川庸太郎	
我國百貨店外貌……………	(一〇)
校友 小林太三郎	
價值不必議論……………	(二五)
大學院學生 佐伯三郎	
學内報……………	(三〇)
學部及大學寮科入學式—専門部入學式—策四	
回關西私立大學學生監學生主事會—徳島縣下學	
校配處將校連の本學専門部第一部教練見學—追	
再試験施行—動靜	
校友彙報……………	(三三)
本學年度學科擔任表……………	(三五)
學生彙報……………	(三七)
本學年度入學選抜試験問題……………	(四〇)

## 始業式に際して

専門部主事 武田藏之助

本日は新に本學に入學せられたる諸君を迎へ茲に始業式を舉行する意義ある日でありまして私の寔に欣幸とする所先づ以て諸君に對して衷心より慶びを申上げます。

私は此際聊か諸君に對し所懐を申し述べて置きたいと思ひます。

御承知の如く本學は創立以來年を重ねること實に五十に垂んとし常に質實剛健なる學風を根本精神と爲し今日に及びたるもので關西に於ける唯一の大學たる事は勿論實に我が國二十五の私立大學中三大學の一に數へられて居るといふ事は定めし諸君も御承知の事と存じます。

而して一部晝間専門部も新設せられてより茲に三年、本年はその全學年の完成を見るに至つた次第で現在の學生數は専門部に於いて三千有餘名、本大學全體を合算するときは其數五千有餘名に及び、内容外觀共に今や完美の域に進みつゝあるものと曰ふ事を得ます。

現代我が國社會の情勢を見るに現時の社會的情勢は未曾有の異狀を呈し今や前途頗る暗澹たるものあり、加ふるに外交上に於ても幾多の國際的難局にありと曰ふことを得べく、此の意味に於て今や國家は内外頗る多事多端の時期にありと曰はなければなりません。

然るに近時學生の氣風稍もすれば弛緩にして研究に對する態度眞摯を缺くの傾向ある如く見受けらるゝは吾人の誠に遺憾とする所であります。

諸君は宜しく思を茲に致し今後この點には深甚の注意を怠らない様に切望する次第であります現時日本は高等専門の教育を受けたる人を社會の新指導者として要求して居ります、從つて諸君は社會の期待に背かないやうに注意し且つ自ら其責の重大なるを會得して自己の人格向上發達を計ると共に、勤勉自重、正を踏んで誤らず、本學學生たるの本分を盡されんことを與々も切望致します。

終りに諸君は各自の健康に留意せられ殊に第二部に入學の諸君は夫々職分をもつて居られる關係上特に健康に充分注意を拂はれ、常に「健康」なる二字の上に確立なる學修方法を取らるゝやう申し添へて本日の入學式の辭と致します。

(専門部入學式に於ける訓辭摘錄)

# 英國海外貿易の衰退

講師 中川庸太郎

## 序 言

昨年九月英國は遂に金本位制度を一時放棄するの不得止に至つたのは周知の事實であるが、事茲に至れる直接有力なる原因は英國政府の發表せるが如くに、外國短期資金の巨額に上る急激なる流出によるものなることは勿論である。乍併禍根はしかく短日月の間に醸成されたるに非ずして、其根本的原因のよつて來るところに溯れば、多年に亘る英國經濟の老衰凋落傾向こそ近年の世界恐慌の重壓に逢着し、愈々加速度的に其破局的なる一斷面を暴露したに過ぎない。換言すれば英國が世界の産業革命の先驅をなして以來、其繁榮の根幹をなしたる基礎工業即ち輸出工業が近年愈々不振を極め、ひいては國際間の受取勘定を悪化せしむる有力なる原因となり、直接には同國社會及經濟界に幾多難たる問題を提供し、間接には財政の均衡を失はしむる一有力なる原因となりたるものにして、是れに加ふるに昨年の總選舉當時に於ける政狀不安及英國海外投資の固定等々により各國をして極度に英國經濟の實體に不安疑懼の念を抱かしむるに至つたため、巨額に上る金の流出となり遂に金本位制度の一時的中止なる最後の手段を撰ばざるを得なくなつたものと信するのである。

然らば世界各國よりの不安疑惑の焦點となりたる英國經濟の真相は如何、是れを詳細に描寫するとすれば、制限されたる紙數にては到底其及ばざること明白であるため、茲では極めて概略に英國海外貿易の一斷面を描寫するのみにて可及的に英國經濟の全豹を髣髴たらしめたいと考へる。

## 一、輸出貿易の重大性と其實勢

周知の如く英國は世界最大の海外貿易國である。即ち米國の如く廣大なる内地市場を有せず、英國重要工業は主として海外市場依存の上に樹立されつゝあるため、英國基礎工業即ち輸出工業の盛衰如何の英國全經濟に與ふる影響は極めて重大である。然るに歐洲大戰前に於ては主として獨逸に、大戰後は主として新興米國及日本に世界のいたるところの市場から英國は疑ひもなく漸次驅逐されつゝあるので、是れが英國朝野の重大なる苦悶となりつゝあつた。

詳言すれば英本國に於ける人口を支持するためには毎年莫大なる食糧品の輸入が必要である(註1)——英國本土に生産さるゝ一年間の食糧品は英國本土住民も亦巨額に達しつゝある。(註2) 然らば右の如き莫大なる輸入は何によつて決済されつゝあるか、申す迄もなく英國工業品の海外輸出と無形輸出なる對外投資利子及其他貿易外受取勘定により相濟され來つたのである。而も英國産業の一般的沈滞に對比して極めて生色ある所謂近代輕工業の興隆あれど、此部門に屬するものゝ販途は主として内地市場に限られるため、基礎工業部門の凋落に代り英國海外市場の觀勢を挽回し得る哉は甚だ疑問視されつゝある。即ち衰退したりと雖も基礎工業の英國海外貿易上に占むる地位は斷然壓倒的にして、到底近代輕工業の繁榮のみを以て英國最大の苦悶たる國際貸借の改善を待望すること不可能と信ぜられるのである。

此表(註3)にても明白なるが如く英國海外貿易の相對的優越地位の遞下は疑ひもなく既に大戰前に於て指呼さるゝところである。而

世界主要國の對する貿易額	世界の百分率		
	1900	1905	1913
英國	19.5	17.5	16.1
獨逸	12.1	12.0	12.6
美國	10.3	9.8	10.1
法國	10.0	8.7	9.0
德國	6.0	6.5	6.1
其他各國合計	57.9	54.5	53.9

英國輸出貿易量及價格  
(年額に換算)

年	量		價額指數 1924=100
	1924=100	價額 百万ポンド	
1913	120	525	65.5
1924	100	801	100
1928	104.6	724	90.4
1929	108.3	729	91.0
1930	93.7	610	76.1
1-6月			
" 7-12	83.9	532	66.3
1931			
1-3	69.2	414	51.6
" 4-5		398	49.6

即ち此表(註5)によつて見らるゝが如く、輸出量に於て一九二九年に至り一九二四年と比較し多少共回復したるも一九三〇年以降急速度に激減し、一九三一年春に至り戦前の約半額に激落するに至つた又價額に於ても昨年春に至り一九二四年に比し約半減する

英、獨、米及佛輸出入額  
(單位十億フラン)

年	輸		入	
	1889	1899	1900	1913
英	3.6	4.1	7.3	13.2
獨	4.3	4.4	7.1	8.9
米	3.6	3.8	4.1	6.9
佛				
輪			9.4	11.6
獨	3.5	5.1	7.1	13.3
米	3.5	4.1	4.4	8.1
佛	5.0	4.4	4.7	8.4

十九世紀末葉頃より其獨占形態は漸く危機に瀕し、歐洲大戰前に至りては獨逸の世界市場に於ける勢威は英國の一大敵國を形成するに至つたのである。然かも此傾向は大戦後と雖も緩々として止むところなく今や世界市場に於ける英國輸出工業の没落傾向は最早や如何なる樂觀論者と雖も否定し能はざるところとなつてゐる。

等の貿易額は此期間多少の消長あれど概して其歩調堅實である。斯くの如き傾向は十九世紀末葉迄溯るときに於て、更に明瞭に指摘することを得る。即ち次表の如きが其れである。(註4)斯くの如くに獨占形態の崩壊する過程に於ては必然的に起る現象ながら、英國の世界市場に於ける獨占的優越地位は産業革命前後より確固たる基礎の上に樹立されたのであつたが、其後續々と興起せる目醒しき後進國のため、

世界主要國輸出貿易  
(百万磅單位)

年	1930				1931
	1	2	3	4	
英國	525	709	724	729	656
獨逸	241	552	612	670	592
法國	493	500	568	620	543
佛蘭西	273	445	413	403	377
世界總額	2,062	3,035	3,208	3,350	2,930
英國對世界	25.4	23.2	22.6	21.8	22.4
獨逸對世界	1.328	2.013	2.028	2.060	1.795
法國對世界	39.6	35.2	35.7	35.4	36.6

然らば右の如きは英國特有の現象なるか、それとも各國共通の現象なるか、各國共通の現象なりとすれば其割合は如何、即ち次表(註6)に依れば、戦前英國輸出貿易の世界總貿易額に對する百分率二五、四%たりしもの、一九三〇年第一、四半期に至り二〇、五%に減退、昨年第一、四半期に於ては遂に一九、九%に激減するに至つた。世界總貿易額より米、獨逸兩國の輸出額を除外したる割合に於ても戦前三九、六%たりしもの昨年第一、四半期に至り三二、九%に減退するに至つてゐる。

尚上表(註7)によれば、戦前の世界總貿易額を一〇〇とすれば一九三〇年に二三〇に増加せるを示しつゝある。然るに四ヶ國の増加率は米國を最高とし、佛蘭西是れに次ぎ、獨逸及英國は各々九及八%の増加に過ぎない。斯かる傾向は國際聯盟調査による數字によつても同様に證明し得る。即ち次表の通りである。(註8)

No. 5 主要國輸出貿易指數 (單位百万磅)

國	1913	1930
英國	100	570
美國	100	495
法國	100	541
德國	100	347
世界計	100	2.687

要之英國輸出貿易は歐洲大戰前より既に緩々に後進國の擡頭により脅威を受けつゝあつたが、戦後は一層其色彩を濃厚にしたるの觀あり、最近年の世界恐慌に直面するにあたり愈々其没落的傾向を鮮明にしたるものと信ずるのである。即ち第四表によれば一九三一年第一、四半期の英、米、獨、佛四ヶ國の輸出額は一九二九年に比して同年の六二%に激減せるに、英國は特に打撃を受け五六%に激落するに至つた。

No. 6 英國輸出貿易の百分率

年	輸出の百分率
1913	13.93
1924	13.01
1925	12.43
1926	10.93
1927	11.01
1928	10.92

## 二、輸入貿易の激増

以上述べたるが如くに英國輸出貿易は戦後殊に不振の状態にあるにかゝらざり他方輸入貿易は戦前に比し著しく増加しつゝある。元々英國は有名なる輸入超過國にして(註9)此の傾向は十九世紀後半より顯著となり毎年一億乃至一億五千萬磅の輸入超過を繼續しつゝあつたのであるが、戦後三億磅を越ゆるに至り、近年に至り愈々激増して四億磅近くに達するに至つた。故に輸出入額差額比率も戦前八二%なりしもの、一九二五年に至り七〇%臺に落ち、一九二六年には六三%に激落して同年勃發せる總同盟罷業の甚大なる

No. 7 英國輸出入額 (註10) (單位百万磅)

年	輸出	輸入	輸出超過額	輸出百分率
1913	634	768	133	82
1921	840	1.085	275	74
1922	823	1.003	179	82
1923	887	1.098	210	81
1924	940	1.277	336	74
1925	927	1.320	393	70
1926	778	1.241	462	63
1927	832	1.218	386	68
1928	843	1.195	351	70
1929	839	1.221	382	69
1930	657	1.044	387	62
1931上	234	418	184	55

八二%なりしもの、一九二五年に至り七〇%臺に落ち、一九二六年には六三%に激落して同年勃發せる總同盟罷業の甚大なる

影響を現はし、翌年稍回復したるも一般經濟の比較的好調と看做されたる一九二九年に於てすら六九%に過ぎず、一九三〇年に及んで六二%、昨年上半季には遂に約一〇に激落するに至つた。

No. 8 英國輸出入品別再輸出額を含まず (單位百万磅)

月平均	食糧		原料		商品	
	入	出	入	出	入	出
1913	24.2	2.7	23.5	5.8	16.1	34.3
1924	47.6	4.7	33.4	8.9	25.0	5.15
1925	47.6	4.6	35.4	7.0	26.7	51.4
1926	41.9	4.2	32.7	3.9	26.3	44.9
1927	44.9	4.4	29.3	6.4	26.9	47.0
1928	44.3	4.5	27.9	5.8	25.7	48.2
1929	44.7	4.6	28.3	6.6	27.9	47.8
1930	39.8	4.0	20.9	5.3	25.6	36.6
1924-1930平均	44.4	4.4	29.7	6.3	26.3	46.8
1913に對する比率	183%	163	109	163	137	
1931平均	33.3	2.8	14.6	4.0	21.0	26.0
5月	6	33.4	2.6	14.1	4.0	20.2
6	7	35.1	2.7	13.6	3.8	20.7
7	8	31.8	2.6	12.5	3.4	20.1
8	9	33.6	2.7	11.2	3.7	22.6
9	10	40.8	3.4	11.9	4.3	27.2
10	平均	34.7	2.8	13.0	3.9	22.0
1931平均	143%	104	55	67	137	69

あることが判明する。即ち輸入に於て、生産活度の有無を現はす原料品輸入が一九二四—三〇年(假りにA期とす)間に於て、毎月平均輸入高は戦前に比し僅か二六%の増加を示すに過ぎず、一九三一年五月より十月に至る期間(假りにB期とす)は戦前の約半額に激減してゐる。然るに一方直接は生産活度に無關係なる食糧品はA期に於て八三%増加し、B期に於ても尙四三%の増加を示しつゝある。斯くの如き數字の示すところは英國經濟の不健全なる様相を最も明白に示すもので、一般事業の萎縮状態にあるに不抱、英國國民の無爲にして徒食しつゝある悲むべき状態の偽らざる告白に外ならぬ。而も更に重大なるは商品の輸出入状態にして、即ちA期に於て輸入が六三%増加、B期に於て三七%の増加ありたるに不抱

輸出に於てA期に三七%の増加あるに過ぎず、B期に於ては却つて三一%の減少を示すに至つた。右は明かに英國が海外市場を喪失しつゝあるのみならず、内地市場をも海外よりの競争によつて壓迫されつゝある例證と信ぜられるのである。尚原料品の輸出も甚だ振はず、B期に至りては三三%の減退を示すに至つたのは英國重要工業の一たる炭坑業不振の原因と觀られる。

要之英國海外貿易の均衡は量に於て甚だしく悪化しつゝあるのみならず、均衡悪化の結果による入超の内容は生産原料輸入のために非ずして、實は主として直接生産に無關係なる食糧品のためであることが明白となつた。

### 三、貿易外受取勘定の不良化

右の如くに英國は毎年例外なく輸入超過を繼續し來つたのであるが、右の輸入超過額は所謂無形輸出 (Invisible export) なる對外投資利益、船舶收入、保險料、銀行差引収入 181 189 178 86 54 -12 96 152 151 9 -39 -24 -84

No. 9 英國々際貸借一借入金及資本再拂込を除く (單位百万磅)

年	輸入超過額	輸 出				計	差引収入額
		海運收入	外貨入 海運 海運 海運	形 短期 短期 短期	政府 政府 政府 政府		
1913	158	94	210	35	—	339	181
1922	171	133	175	52	?	360	189
1923	195	133	200	65	-25	373	178
1924	324	140	220	75	-25	410	86
1925	395	124	250	75	?	449	54
1926	477	120	270	75	?	465	-12
1927	392	140	270	78	?	488	96
1928	358	130	285	95	?	510	152
1929	366	130	285	102	?	517	151
1930	A 392	100	210	70	21	401	9
	B 392	105	235	70	21	431	-39
1931	A 380	85	155	45	16	301	-24
	B 385	90	190	60	16	356	-84

對外投資に充當せられ戦前其額約四十億磅の巨額に達してゐた。(註12) 此表(註13)の示す如くに國際貸借の差引勘定は戦前二億磅に近かりし

を受け差引不足千二百萬磅に達した。其後漸次増加し一九二八―二九年には一億五千萬磅に回復するに至つたが、一九三〇年以來急速に下昇し一九三〇年は差引受取九百萬磅或ひは三千九百萬磅の不足額となる哉も計れずと報ぜられてゐる。更に昨年度に至つては二千四百萬或ひは八千四百萬磅の差引不足額に達するであらうと悲觀されつゝある。殊に一九三〇年以降は海運收入と對外投資利子の激減が顯著である。此内でも海運收入の減退は世界貿易の萎縮と運賃の下落にあること勿論で、次の表(註14)に依れば如何に海運界が窮境に陥つてゐるか判明する

No. 10	指 數	尚海外投資
運賃 %		收入の最近
1920	100	
1921	37.6	
1922	29.7	
1923	28.4	
1924	29.6	
1925	25.8	
1926	28.0	
1927	27.8	
1928	25.8	
1929	24.9	
1930	19.1	
1931	20.6	
1月	2	19.3
2	3	19.7
3	4	19.9
4	5	20.6
5	6	18.8

減も對外投資、殊に中歐に對するものが固定し、利子收入さへ不可能になつたと云はれてゐる。斯くの如くに巨額に上る英國毎年の入超額は無形輸出によつて償はれつゝあつた。即ち英國海外貿易のみを以てしては到底英國全經濟を支持すること能はず。貿易外受取勘定を以て毎年の逆調が均衡を得つゝあつたのである。

### 四、結 語

以上概略述べたところにより明白となりたるは、英國は毎年巨額の輸入超過を繰返し、且此莫大なる入超額は資本利子其他によりて支拂はれつゝあることである。換言すれば英國國民は其産業により生活せず、主として資本利子により生活しつゝある *parasites* となりつゝあることである。即ち英國は産業以外のものにより一國々民の收入及財政收入を捻出しつゝある。其れは國庫收入の均衡を得るがために必要であり、且又一般國民の收入を得んがためにも緊要である。尙又多數の企業は事業不振のため外國投資より得たるところの收入を以て事業の經營を繼續せざるべからざる境地にある。

然らば斯くの如き英國海外貿易不振の原因は何處に存在しつゝあるか。以下極めて簡單に是れを列擧して此一篇の結尾としよう。

(A) 内部的原因 是れを先づ内部的原因及外部的原因の二に大別した。乍併内的原因又は外的原因といへ、其觀點を何れかに置きたりといふに過ぎずして是等を區別する根本的標準なるもの存する非ざることを蛇足ながら豫め斷つて置く。更に對内的原因は分つて次の五とする。

(1) 重要産業の不振、要言すれば英國基礎工業の組織、設備、技術が舊式にして假睡状態にあることである。かつては英國繁榮の基礎をなしたる石炭、製鐵製鋼、木綿工業等が其後新進工業國の發展勃興にかゝわらず、何等徹底的なる改良改善を加へらるゝことなく、不合理、無統制なるまゝにて一世紀以上の假睡を貪りつゝあることである。

(2) 勞銀及勞働問題、英國の海外市場に於ける競争力の低下は主として英國の生産費高によるものと一般に看做されつゝあるが、生産組織及設備の舊式による生産費高と共に亦英國の勞銀高も其有力なる原因として數へらるゝであらう。周知の如く英國は勞働組合の極めて強力なる國である。故に事業界は如何に不振であらうとも勞銀の引下げは容易に行はれ難い。加之英國社會政策の一端として實行されつゝある失業保險と相俟つて英國勞銀伸縮性を全然癱痺せしめつゝある。

(3) 租稅過重 更に英國の海外進出力を萎縮せしめつゝある生産費高は資本に對する重稅である。英國に於ては租稅過重の怨聲を聞くや久しい。即ちそれは戦後に於ける國費多端、特に英國社會政策による失費激増による一般國民への轉課であるが、是れがため産業界に重壓を加へらるのみならず、結果に於て愈々失業を續出せしむる原因となりつゝある。

(4) 幣制改革による原因(註15)英國は一九二五年に至り戦後の通貨膨脹政策を放棄

して通貨收縮策を採用、舊平價を以て金解禁をなしたのであるが、是れは金融資本の利益と名譽のため事業資本を犠牲し、ひいては生産費を高かゝらしめたと非難されてゐる。

(5) 英國人の個人主義 英國の傳統的精神たる自由放任主義が今や歪曲されたる個人主義となり、産業組織及設備の合理化及改善を行はしめ得ざる禍根となりつゝありと稱されてゐる。

右の外一般に英國に於ては英國人は産業人として世界最優秀の人類にて其生産組織は尙依然として海外競争に耐ゆるものと信じられ、戦後打續く不況もそれは一時的の原因にしていつかは戦前繁榮の状態に還へるものと考へられてゐる。他面英國勞働者は事業の不振、利潤の減退あるに不抱、高賃銀の支給を受け、或ひは又國費支出により生活を保證されてゐるため、其購買力は一向に進下せず、主として内地市場目的のため存續せる近代輕工業が、海外市場依存の上にある基礎工業の不振に對比して、好況を續けつゝある有力なる例證はれである。

(B) 外部的原因 外的原因を分けて次の七とする。

(1) 各國産業の發達 所謂産業後進國の産業發達し、世界市場に於ける英國の優越地位が脅威さるゝに至つたこと。殊に大戰後此傾向は加速度的に高められ、英國は世界の有らゆる市場から驅逐されつゝある。即ち産業革命の先驅者たりし英國の優先的地位は過去一世紀の間に全然喪失され、今や却つて改善せられざる舊式産業組織及設備が英國の海外に於ける競争力を弱むる禍因となり、最新式設備と合理化されたる組織による諸外國の競争力に耐へ得ざるに至つてゐる。

(2) 英國植民地の發達 歐洲大戰中の刺戟により英國自治領及植民地の産業が顯著なる發達をなしたるため最早英本國よりの製造品供給に依存する必要非常に減退した。故に従前の如く英本國の忠實なる原料及食糧品供給の單なる倉庫たるの地位に甘んぜざるのみならず、英商品と其商品市場を争ふに至つたのである。



(3) 海外投資の減退 英國對外投資が英國商品海外進出に非常なる貢獻をなした。然るに大戰後英國對外投資、殊に植民地以外の外國向投資が減退して戰前の約半額に及ばざるの状態に至つた。此對外投資の減退こそ英國輸出貿易萎縮の最大原因と主張するものもある位である。(註16)

(4) 貿易政策 英國の自由貿易主義は各國が未だ産業後進國である間は英國の大をなさしむる重大なる要素であつた。然るに世界の各國は専ら自國産業の發達に重點を置き英國の勢威を回避しつゝ、一途國富國力の充實に努力し、遂に英國をして其自身完全なる自由貿易主義には重大なる逡巡を感せしむるに至つた。

(5) 世界需要品の變化 大戰後世界各國の需要する輸入品に一大變化の齎らされた事である。即ち實に於ては英國品の如き精巧高價なるものよりも、價格を第一義に置く安價品の需要起るに至つた。右の外英國が主として海外に市場を有する鐵類、綿布、羊毛等の如きものより米國又は獨逸に顯著なる發達をなせる自動車、蓄音機、ラヂオ、電氣器具類等が世界流行の寵兒となつたことである。

(6) 戦債及賠償金 大戰の結果世界は莫大なる戦債と賠償金を負擔するに至り。是れがため世界購買力に種々たる障害を興へた。

(7) 世界恐慌と購買力の減退 世界各國の購買力の減退が、歐洲大戰後全く回復するに至らざる間に最近年より愈々深刻となりたる世界恐慌の重壓に逢ひ益々其度を甚だしくした。歐洲大戰は莫大なる人力及資力を破壊したる上、各國の財政を危機に瀕せしめ且信用組織を破壊した。加之世界に於ける生産設備の過剰は、弱小獨立國の簇生と深刻なる關稅戰と莫大なる戦債及賠償金とにより、消費との間に重大なる溝渠を作るに至つた。

(註1) 一九二四—三〇年平均毎年食糧品輸入額は五億三千万磅に達してゐる。The Economist, Lond. Monthly Supplement, Nov. 28, 1931, p. 40.

(註2) 同上期間に於て工業品原料輸入額毎年平均三億五千万磅に達してゐる。

Ibid., 40.

F. Sternberg, *Krise und Aussenhandel* 1929.

Woytinsky, *Welt in Zahlen*, V. s. 213.

(註5)(註4)(註3) C. G. Clark, *Statistical studies of the Present Economic Condition of Great Britain*, E. J. Sept. 1931, p. 343.

Ibid., p. 345.

C. G. Clark 調査を基礎とす。

(註9)(註8)(註7)(註6) The Memorandum on International Trade, The League of Nation, 1928.

英國が輸出超過國より入超過國に轉ぜるは一八七三年頃にて、其原因に就ては(一)、英國が海外投資國として頂點に達すること(二)、英國海運業の利潤増加による。T. W. Taussig, *International Trade*, 1927, pp. 237-38.

エコノミスト、大毎、昭和六、九、一五基礎。

The Economist, Lond. op. cit., を基礎とす。

(註12)(註11)(註10) 英國海外投資總額は普通四十億磅と稱せられてゐるが、エコノミストの計算に依れば、名目價額三十三億四千万磅で、實質價格は二十六億一千万磅に過ぎずとされてゐる。The Economist, Lond. Aug. 22, 1931, p. 342.

(註13) 1913-24, 奥村、現代英國經濟研究。1925-29, シーメンフリート、英國の危機。

(註15)(註14) 1930-31, The Economist, Lond. Dec. 12, 1931 pp. 1110-12. 因に國際貸借勘定の計算は計算者により極めて區々である。ために、此表も勿論蓋然性の範圍を出でること申す迄もなす。

The Statist, Lond. Oct. 17, 1931, p. 533.

英國の金解禁に就いてはケーンズ等により極力反對され來つたのであるが、最近メンツェリアによつて其失敗であつた事が力説されてゐる。A. G. McGregor, *World Depression to World Prosperity*, 1931, pp. 65-71.

(註16) T. E. Holsinger, *The Mystery of the Trade Depression*, 1929, p. 31.

# 我國百貨店外貌

校友 小林太三郎

## 一、概況

近年我國小賣分配機構の中において其特異なる組織制度の下に異常なる飛躍的發展を遂げ群小賣業者の悲鳴をチャズと聞き流し悠々業界の王座を占め多幸なる未來を約されたるかに見えるものは即ち我國百貨店其ものである。現に我國には三越、白木屋、松屋、松坂屋、高島屋、大丸、十合の七百貨店を始め大阪には阪急始め三笠屋、井筒屋等あり、東京には尙伊勢丹、布袋屋、丸菱があり、横濱には野澤屋があり、札幌、函館、小樽等には今井、弘前に宮川、仙臺に藤崎、富山に岡部、金澤に宮市、岡山に天満屋、福岡に紙興、鹿児島に山形屋と言つたやうに全國主要都市には殆んど百貨店見をざる所なき迄の盛況振である。今之等の前記七百貨店について其組織變更當初より今日に至る過程中資本の點よりする躍進過程を見ても如何に素晴しき發展を爲せるかに一驚するだらう。

(昭和六年一月調)

百貨店名	設立年月	設立當初ノ資本金	現在資本金
株式會社 三越	明治廿七年十二月	五十萬圓	(拂込千五百萬圓) 千五百萬圓
株式會社 松坂屋	明治四十三年三月	百萬圓	(拂込壹千五百萬圓) 千二百萬圓
株式會社 白木屋	大正八年三月	五百萬圓	(拂込六五〇萬圓) 七百五十萬圓
株式會社 松屋	大正八年三月	百萬圓	(拂込三〇〇萬圓) 五百萬圓
株式會社 高島屋	大正八年八月	三百萬圓	(拂込五〇〇萬圓) 七百萬圓

株式會社 十合 大正九年一月 三百萬圓 (金額拂込) 三百萬圓  
株式會社 大丸 大正九年四月 千二百萬圓 (拂込七八〇萬圓) 千二百萬圓

上記の表に従へば我國百貨店の濫觴と稱して居る三越百貨店にして未だ三十年を出てず爾餘の百貨店の大部分が大正八九年の設立にかゝり僅かに十數年の経過を有せるものに過ぎない事が會得出来る。

然も其資本に就て見るに三越は正に三十倍の飛躍をなし、松坂屋又十二倍に松屋五倍に皆夫々に一大發展振りを示し然も之等百貨店の資本總計は六千五百萬圓に達し其拂込資本の總計は四千四百八十三萬五千圓に達して居る事が分る、更に去月末其株主總會に於て三越は資本金の倍額増資の可決確定が傳へられ大丸にありても京都大丸との合併増資は近く決定の由従つて前掲五百貨店の資本總計は更に千七百萬圓を加へる事になる。

之を(註)アメリカ著名の百貨店の多くが十九世紀の後半に其發生を見少くとも六十年乃至七十年の長き歴史を有するに對比する時我國百貨店の一大發展振には正に驚異に價するものがあらう。

註・現在アメリカに於ては二千以上の百貨店があり而も其中年賣上額百萬弗乃至夫以上に出るものは四百四十五店に達して居る又或研究家は現在アメリカには四千五百のデパートがあると報告して居る勿論之は大都市に於ける小き百貨店と同様地方の小都市に於ける百貨店をも包含せるものである事は間違ひなき所である。とまれ之等百貨店の營む總賣上額はアメリカに於ける全小賣販賣額の十五%より二十%に達すと云はれて居る今經營費に關連して研究調査を遂げたハーバード大學商業研究所の報告によるとアメリカに於ける百貨店の總數は五百二十七店にして之を各賣上高によりて細分すれば年額二百萬弗以上の賣上を爲すもの百三十三店同五十萬弗乃至二百萬弗未滿のもの百六十八店同五十萬弗未滿のもの二百二十六店と云ふ有様である。

尙之が詳細は次表によりて見らる可し。

(註 ハーバード大學商業研究所調査 (一九二九))

一年賣上額	百貨店數	集計賣上額	一店平均賣上額
二百萬弗以上	133	\$ 1,190,523,000	\$ 5,200,000
2,000,000— 3,990,000	58	" 197,398,000	" 2,800,000
" 4,000,000— 9,999,000	46	" 317,051,000	" 6,000,000
" 10,000,000以上	29	" 676,074,000	" 18,500,000
五十萬弗— 二百萬弗未滿	168	" 169,606,000	" 910,000
" 500,000— 749,000	59	" 35,825,000	" 600,000
" 750,000— 999,000	36	" 32,642,000	" 906,000
" 1,000,000— 1,999,000	73	" 101,139,000	1,300,000
五十萬弗未滿	226	" 59,137,000	" 230,000
" 150,000未滿	59	" 7,916,000	" 94,000
" 150,000— 299,000	83	" 18,640,000	" 200,000
" 300,000— 499,000	84	" 32,581,000	" 380,000

尙同國に於ける須要百貨店の創立年代を示せば次の如し。

店名	所在地	年代
Abraham & Straus	Brooklyn, N. Y.	1865
T. Eaton & Co.	Toronto, Canada	1869
The Fair	Chicago, Ill.	1875
William Filene's Sons' Co.	Boston, Mass.	1881

Gimbel Brothers.	Milwaukee, Wis.	1887
Jordan Marsh Co.	Boston, Mass.	1851
Lord & Taylor	New York City	1826
R. H. Macy Co.	New York City	1858
Marshall Field & Co.	Chicago, Ill.	1881
John Winemaker	Philadelphia, Pa.	1861
L. Bamberger & Co.	New York, N.Y.	1893
The Emporium	Toronto, Canada	1869
Mandel Brothers	Chicago, Ill.	1855
James McCreery & Co.	New York City	1868
Saks & Co.	New York City	1902
Strawbridge & Clothier	Philadelphia, Pa.	1868
Woodward & Lothrop	Washington, D. C.	1880

然も之等の百貨店が本支店の増築擴張さては支店出張所分店の新設工事に日もこれ足らざる有様であると云ふのに至つては敢てチャリナリズムの仲介を待たずとも一般社會人は百貨店の資金來を想到し群小賣業者のアンチ百貨店熱に一層油を注ぐ事にならうと言ふものである。今最近ニュースの報ずる所に從つて其擴張の實際を展開する事にしやう。

## 二、擴張戰線實相

A 三越では銀座(六階建延坪二千五百坪)の支店を設置して銀座の商店街に衝動を起したが更に矢繼早に新興新宿はほてい、やの筋向ひ舊武藏野館跡へ地下三階地上八階計十一階總延坪四千五百坪(舊新宿支店の四倍以上のもの)の新築工事も昨秋完成なし暮の大賣出しを期として業界進出を始め新宿商店街に一大シヨツ

クを與へた事は既に人の知る所である。従つて新宿にありては三越の新舊兩支店とほていやと新宿松屋との四百貨店が對立し銀座に次ぐ百貨店街を形成して對百貨店對小賣商店の夫々の間に素晴しき販賣戰術が展開されるであろう事は想像するに難くない。

更に大阪支店（延坪七千五百坪）にありては其二倍大擴張計畫を目論見堺筋に脅威的玉城を築かんとすと言はれてゐる。更に同店にては九條支店（建坪五百餘坪延坪三千五百坪全部借入）の計畫を立て港區三十數萬の消費層を一手に獨占せんとしてゐる之が具體化として今春早々建築にかゝり本年末の賣出しには華々しく打つて出る豫定と言はれてゐる、更に既設神戸支店（延坪二千五百坪）の外に大連支店（延坪八百坪）及京城支店（延坪一、〇〇〇坪）の増築完成を終へ更に新しく金澤、高松（共に各延坪二千坪弱）等にも支店出張所を増設し以て全國的消費層の獨占を策しつゝある有様である。

上記各地支店出張所の擴張増設と相伴ひて其大本營とも稱すべき室町本店の隣接地に約延坪六千坪の増築工事に着手し昭和七年竣工の豫定である完成の曉は現在の本館と合せて（建坪九千坪）一萬五千坪の大百貨店となるわけである。今設計工事中の分を除外し既設の本支店出張所に就て見るも其總延坪數實に三萬二千八百坪に達すると言ふ盛大さである。

B 東京市内外の樞要商店街へ夫から夫へと支店を設けて一般小賣商人に一大壓力を加へてゐるのは白木屋である、既設支店の外先年閉店せる錦糸堀及神樂坂の二つを加へると大體次の如くである。大森（延坪六〇〇坪）大井（五〇〇坪）五反田（四〇〇坪）大久保（三〇〇坪）大塚（五〇〇坪）錦糸堀（五〇〇坪）神樂坂（四五〇坪）麻布十番（四五〇坪）此外に丸ビルと帝大内へ出張店を設け市内外に亘りて隈なく支店網を張り顧客吸收に餘念なき有様である。更に目下日本橋の本店増築工事進捗中にては地下二階地上七階延坪六千坪のものにて現在の

本館を合せて延坪一萬坪となり本年秋季竣工の豫定である。東京以外として大阪支店（延坪三千七百五十坪）及京都支店（三百坪）がある勿論大阪にては支店の外に各樞要地に出張網を張り消費層獲得に努力せる事は東京市に於けると同一である、即次の如し。

芦屋出張所、阪神出張所、京阪出張所、香里出張所、福島出張所、玉造出張所（以上出張所の總延坪六二四坪）然しながら主力を日本橋の本店に傾注せる上各地所在の支店出張所の細胞を活躍させやうと言ふのである。

大森、大塚、錦糸堀、神樂坂等は成績良好の由傳へらる。

C 松坂屋は多くの支店は持つて居らないが名古屋本店（建坪——）銀座（建坪——坪）の外に上野支店（建坪一萬坪）を竣工閉店して居り大阪支店は目下新築工事中にて現在其四分の一餘出來し完成は尙數年後に残される様である、此延坪數は一萬五六千坪にて建物としては日本一の大百貨店として其偉容を誇らんとするものゝ様である。

D 松屋の銀座本館は延坪七千坪（内千五百坪は徴兵保險會社使用）であるが今川橋に七百坪の家庭部があり、大森に支店（百三十坪）がある。同店の發祥の地たる横濱の店は伊勢佐木町の目拔の場所へ進出し延坪二千五百坪の最新百貨店様式の建築であると傳へられる。

尚淺草の東武鐵道驛に延坪一萬二千坪のビル工事中にて竣工の曉は松屋の支店出現することに決定して居る、只其規模の點に至りては豫斷するを許されないが約一萬坪位を使用する事にならうと言はれてゐる。

E 高島屋にては日本橋通二丁目日本生命保險會社のビル竣工の曉は（延坪八千五百坪）之を借入れて地上地下十階の大百貨店とする計畫の様である。大阪にては長堀橋の本店（延坪五千坪）の外に昨年十二月十五日南海ビル第一期工事（延坪三千六百七十三坪）竣成と同時に全階三千坪を借受けて同十八日よ

り南海高島屋として沿線の顧客を一手に獨占せんと努力してゐる。京都支店は現在の場所が不便なりとして適當の場所へ移轉の計畫あり。

F 大丸にては既設の神戸（延坪——坪）京都（延坪四八六坪）の兩支店の外に大阪本店の御堂筋進出の計畫あり、今其デザインに従へば現在敷地面積六百餘坪の所へ新に七百九坪を増築現在營業のものを合せて計千三百八十九坪の老なるデパートハウスを現出せんとしてゐる。

軒高は地上百尺の七階建て構造は鐵筋コンクリート外面は現在と同様のものにて異つて居るのは内部の地下一階の外に今度更に地下二階を設けると言ふのである、昭和八年二月頃完成の豫定と言はる。

上來述べたる如く我國百貨店の勢力はこゝ數年後に於ては現在の二倍大の發展振を示すものと考へれば間違ひがないまさしく百貨店時代の到來と言ふ事が出来る。然らば斯かる擴張發展の途上にある百貨店に立ち働ぐ男女の従業員の数は一體幾何位かと言ふ疑問が起るだろう、今全國的に其實數を知る資料は手許にないが大阪市に存在する百貨店のみについては次の表によりて其大數を窺ふ事が出来る。（大阪百貨店協會調本年一月）

店名	使用人員	店名	使用人員
大丸	二、〇五七	白木屋	六六〇
十合	五〇〇	高島屋(長堀店)	一、三五〇
松坂屋	七五〇	全(南海店)	八五〇
三越	一、六一三	阪急	一、四七三
合計	九、二五三		

即ち本年一月調べにて九千を突破して居る有様である尙未加入の爾餘の百貨店組織の者を加へる時恐らくは其數一萬を超過する事だろうと思ふ然も百貨店經營上其規模と成績に於て一段と其牙を見せて居る東京市にありては更に多數の従業員

員を使用せる事が考へられる聞く所によれば東京三越のみにて五千は突破せる由以て其豪勢振りを窺ふに足る更に神戸、名古屋、京都並に全國各地に存在する有名無名の百貨店を包含せる曉は概數三萬人前後のものになるのではないかと思はれる、素晴らしい我國百貨店と言はざるを得ない。

然らば世は擧げて不況の底に萎微沈滞し行人も物言へば唇寒し昨日今日の世相に直面してかゝる擴張を爲しかゝる従業員を包擁せる我國百貨店は一體如何なる營業状態にあるのか言ひ換へれば如何なる販賣戰術の下に如何なる販賣利潤を獲得せるかと言ふ事が次に解決されねばならぬ問題である其處で次項に於て代表的百貨店について其營業成績を特に最近數年間に亘りて檢討する事にしたい。

### 三、營業成績實相

元來我國百貨店は其營業方針並に營業成績に關しては極秘と迄は行かなくとも随分秘密主義を固執して居る、それかあらぬか前記七百貨店の或ものゝ如きは考課表すら外部に出さぬと言ふ遺方である。店の繁榮は經營者の手腕にのみ俟つ可きものでなくして御客様の賜なりと考へるならば今少し明るくオープンにならぬものかとさへ言ひ度くなる。とまれ前記五大百貨店について昭和元年より五ヶ年間に亘りて其營業成績の實相を左に展開する事にする。

第一表 五大百貨店毎期成績表

期	拂込資本金		利益金		利益率		配當率	
	上	下	上	下	上	下	上	下
昭和元年	九、〇〇〇	九、〇〇〇	一、三三〇	一、三三〇	一五%	一五%	一四	一四
昭和二年	九、〇〇〇	九、〇〇〇	一、三三〇	一、三三〇	一五%	一五%	一四	一四
昭和三年	九、〇〇〇	九、〇〇〇	一、三三〇	一、三三〇	一五%	一五%	一四	一四
昭和四年	九、〇〇〇	九、〇〇〇	一、三三〇	一、三三〇	一五%	一五%	一四	一四
昭和五年	九、〇〇〇	九、〇〇〇	一、三三〇	一、三三〇	一五%	一五%	一四	一四

白木屋	大丸	三越	松屋										高島屋										白木屋										大丸									
			昭五	昭四	昭三	昭二	昭元	昭五	昭四	昭三	昭二	昭元	昭五	昭四	昭三	昭二	昭元	昭五	昭四	昭三	昭二	昭元	昭五	昭四	昭三	昭二	昭元	昭五	昭四	昭三	昭二	昭元										
六、一四七	七、八〇〇	一一、六〇〇千圓	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	六、六五〇	六、五〇〇	六、五〇〇	六、五〇〇	六、五〇〇	六、五〇〇	五、四〇〇	五、五〇〇	五、五〇〇	五、五〇〇	五、五〇〇	五、四〇〇	七、八〇〇	七、八〇〇	七、八〇〇	七、八〇〇	七、八〇〇	七、八〇〇		
一〇〇	八五五	一、六七〇千圓	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、九〇〇	三、三六〇	三、七五〇	三、七五〇	三、七五〇	三、七五〇	二、二〇〇	二、一八〇	二、一八〇	二、一八〇	二、一八〇	二、一八〇	二、七九〇	二、九一〇	二、九一〇	二、九一〇	二、九一〇	二、九一〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	五、六〇〇	九、六〇〇	一、九六〇	一、九六〇	一、九六〇	五、九二〇		
三、八	一〇、九	三〇、五%	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇	二、七	二、四	二、五	二、四	二、五	二、四	二、〇	二、〇	二、〇	二、〇	二、〇	二、〇	七、九	八、〇	八、〇	八、〇	八、〇	八、〇	〇、五	〇、五	〇、五	〇、五	〇、五	〇、五	七、五	一、二	一、二	一、二	一、二	六、八		
二、五	六、四	一四、三%	〇、〇	〇、〇	〇、〇	〇、〇	〇、〇	〇、〇	〇、〇	〇、〇	七、〇	七、〇	八、〇	八、〇	八、〇	八、〇	六、〇	六、〇	六、〇	六、〇	六、〇	六、〇	五、五	五、五	五、五	五、五	五、五	五、五	六、〇	六、〇	六、〇	六、〇	六、〇	六、〇								

第二表 自昭和元年  
至五年平均每期營業成績表

高島屋	四、四〇〇	三、〇	一、二二	七、四
松屋	三、〇〇〇	四、九〇	三、三七	一、三、七

前表の示す如く三越にありては過去五ヶ年間に其拂込資本金に於て九〇〇萬圓より一千五百萬圓に増加を見て居る、而も其利益金は毎期七八十萬圓を擧げ利益率に至りては年に三割乃至四割の高率を示して居る。勿論昭和四年の上期より少々減退の色を見せ二割内外の所に下降して經營多難の色を見せてゐる。配當も從來一割五分の所を五年の上期より三分減の一割二分にして内容の整備を圖らんとして居る事が分る。

大丸にありては拂込資本金七百八十萬圓に對し每期順調なる收益を擧げ利益率は一割二分前後を示し、來れるも五年度に至りて俄然收益遞下し配當率も二分減の六分と云ふ状態である。

白木屋にありては業績最も不振にて昭和元年二年と打續いて缺損の状態を示して居る勿論三年の下期より漸く恢復の調を示し毎期三十萬圓前後の收益を示し五分の配當を續けて居る無論他百貨店同様四年の下期より漸次収益率遞下の有様に經濟界不況を如實に反映して居る。

高島屋にありては毎期最も順調なる收益を擧げ利益率も一割乃至一割五分と言ふ所である從來八朱の配當を續けて來たが五年の上期より一分減の七朱と言ふ事になつて居る。

松屋にありては其拂込資本金三百萬圓に對して毎期五十萬圓前後の收益を示し利益率も年三割乃至四割と言ふ高率を示して居る此點三越と同じく他百貨店を遙に抜いて居る、勿論四年に入りて漸く減退の色を示し收益昔日の如くならずと雖も尙毎期三十萬圓の利益を擧げて居る配當は從來一割五分を持續して居つたが五年の上期は一割二分に下期は一割と遞下して居る。

總して三越、大丸、松屋は昭和三年を、白木屋、高島屋は同四年を頂點として收

益遞減の状態にある事が看取出来る。

さあれ第二表の示す如く三越、松屋は其平均每期収益率に於て三〇%強を示し高島屋、大丸又何れも一〇%強を示し百貨店經營の有利さを示して居る、只白木屋にありては不振甚敷しく平均収益率三八%と言ふ有様である。

これは前經營幹部の無能重役間の暗闘が有力なる因をなして居ると聞く如何なる事業にも人を得る事の重要さが痛感される。

次は前期各店の推定賣上高並に營業効率を見る事にしよう。

第三表 推定賣上高並營業効率調

三越	賣買益	推定賣上高	期商品在高	回轉率	營業費	賣上高	利益金比率	高	白木屋		松屋			
									昭和五年	昭和四年	昭和五年	昭和四年		
昭和元年上期	五、六四四 <small>千円</small>	三、七、六二七 <small>千円</small>	五、四八六 <small>千円</small>	一三、七	三、九九七 <small>千円</small>	九、五三二 <small>千円</small>	三、六%	五、三三七	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七
昭和元年下期	六、三〇一	四、三、〇七	六、二二四	一三、五	四、三三三	九、四四三	三、八	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和二年上期	六、四、三四	四、三、八二七	五、三、七四	一五、九	四、五、〇	九、四、四五	三、九	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和二年下期	七、一、二六	四、七、五三三	五、七、七六	一六、六	四、九、九二	九、六、九五	四、〇	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和三年上期	七、二、六〇	四、八、四〇〇	五、二、三〇	一八、五	四、九、九二	九、七、七五	四、〇	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和三年下期	七、五、六八	五、〇、四三三	六、四、四九	一五、七	五、二、五二	九、六、六六	三、九	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和四年上期	七、一、四三	四、七、六〇〇	五、八、〇〇	一六、四	五、一、三三	九、二、七四	三、七	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和四年下期	六、八、五四	四、五、六九三	六、五、三三	一四、〇	四、九、九二	九、二、七四	三、七	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和五年上期	六、六、〇三	四、四、〇〇〇	五、八、九二	一四、九	五、三、三六	八、四、三三	三、一	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和五年下期	七、四、六九	四、九、七三三	七、七、〇四	一二、九	六、〇、六四	八、二、一一	二、八	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
大丸														
昭和元年	三、〇、四四	二、〇、三九三	二、七、七七	七、四	二、五、六	八、〇、六	二、六	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和二年	四、六、九	二、六、五九三	二、八、九一	九、八	三、三、〇	八、六、六二	三、五	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和三年	五、二、〇四	三、四、六九三	二、八、八三	一二、〇	三、九、八八	八、六、九二	三、五	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和四年	五、四、五三	三、七、六六七	二、六、三二	一四、三	四、三、九五	八、五、五	二、五	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
高島屋														
昭和元年上期	二、三、三	一、四、八三三	二、〇、八六	一三、七	一、七、四五	八、四、八	二、九	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和元年下期	二、三、三	一、四、八三三	二、〇、八六	一三、七	一、七、四五	八、四、八	二、九	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和二年上期	二、〇、五五	一、三、七〇〇	一、三、七〇〇	三、四	三、四、四	七、九	二、五	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和二年下期	二、一、二二	一、四、八六六	一、四、八六六	三、六	三、六、八	八、二	二、一	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和三年上期	二、一、二二	一、四、八六六	一、四、八六六	三、六	三、六、八	八、二	二、一	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和三年下期	二、一、二二	一、四、八六六	一、四、八六六	三、六	三、六、八	八、二	二、一	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和四年上期	二、一、二二	一、四、八六六	一、四、八六六	三、六	三、六、八	八、二	二、一	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和四年下期	二、一、二二	一、四、八六六	一、四、八六六	三、六	三、六、八	八、二	二、一	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和五年上期	二、一、二二	一、四、八六六	一、四、八六六	三、六	三、六、八	八、二	二、一	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	
昭和五年下期	二、一、二二	一、四、八六六	一、四、八六六	三、六	三、六、八	八、二	二、一	三、五、四四六	二、四三一	一、四、六	四、三三三	八、一八二	一、三、七	

昭和元年下期	二、五〇〇	一六、七〇七	二、四〇三	一三、一九	八、九〇〇	三、四
昭和二年上期	二、五九〇	一五、七二七	二、三三八	一三、三三	八、九六六	三、四
昭和二年下期	二、五七一	一七、一四〇	二、四三二	一四、一	八、九五五	三、五
昭和三年上期	二、五九〇	一七、三〇〇	二、三三八	一五、三三	八、六〇〇	三、三
昭和三年下期	二、六三四	一八、八二七	二、三九六	一三、四	八、九〇一	三、三
昭和四年上期	二、五三三	一六、六六七	二、五四六	一三、一	八、四四九	三、二
昭和四年下期	二、三九七	一五、八〇〇	二、七〇三	一七、	七、九九七	二、五
昭和五年上期	二、〇三二	一三、五四〇	二、三九一	一三、	七、六九四	二、二
昭和五年下期	二、三五一	一五、六七三	二、七五二	一四、	七、五四七	一、九

第四表 自昭和元年 平均每期推定賣上高並營業効率調

	賣買益	推定	期末商	回轉率	營業費	千四ニツ	賣上高	利益比
	千円	千円	品在高	千円	千円	益	金比	率
三 越	六、八七元	四、五五元	六、〇三七	一五、二	四、九三	九、六三	三、六	
大 丸	四、六六一	三、三三二	二、七七八	一六、	三、七七八	八、四三	二、六	
白 木 屋	一、五〇六	一〇、〇八一	二、〇六一	一〇、	一、四四〇	六、八〇三	〇、九	
高 島 屋	一、八四三	一三、三〇三	三、三三三	七、	一、六三三	七、五三四	二、一	
松 屋	二、四三二	一六、二〇七	二、四六九	一三、	一、九六	八、四三	二、九	

第三表によれば三越は賣買益に於て最も順調なる成績を見せ其賣上高は五千萬圓に近く一年通算一億圓弱と言ふ豪勢である。回轉率に至りては五年の下期が最低數字を示して居るが然も尙一年十三回弱と言ふ有様である。

大丸においては逐年業績の發展を見せ四年度は其頂點に達したと見る可く賣買差益五百四十五萬圓餘を擧げ回轉率一四、三と言ふ躍進振りである。

白木屋にありは特に其商品回轉率の昂騰振が目立つこれは經營の整備上買取の商品量を可能的に減少し反對に委託商品量の増大によると言はる従つてポヂチツな意味に於ける業態の進展にあらざる所に今後の努力を必要とするわけである。

高島屋にありては累年順調なるコースを辿つて居る事が見える即ち商品保有量の増大と共に其賣上高も遞増を示し昭和元年の上期一千五十二萬七千圓より同五年下期一千四百八十八萬六千圓と言ふ發展である。

松屋に至つては往時三越と雁行せる白木屋にかわりて三越に亞ぐの好成绩を示し每期賣上高千三百萬乃至千八百萬と言ふ盛況にて商品回轉率十一乃至十五と言つた有様である。總して過去五ヶ年を通じて其成績を見るに第四表の示す如く三越首位を占め松屋之に次ぎ更に大丸、高島屋、白木屋と言つた様な順位である。

註一、各店推定賣上高。各店に於ては其賣買差益は發表するも其賣上實數に至りては之が發表を爲さず外部より容易に窺知するを許さない状態である而も各店に於て協定價を有する一部の商品以外のものは假令類似の商品にても販賣價格を異にし従つて之に對する益率も必ず相違するであろう事は想像するに難くないが今之等の具體的運點を一切見ぬ事として各店共一樣に販賣價格の一五%を收益せるものとして逆算せるものなり。

註二、回轉率。回轉率算定は每期推定賣上の倍額を期末商品有高にて除したるものなり。

註三、前掲各表の數字はダイヤモンド發行銀行會社年鑑によりたり。

斯の如く百貨店の収益は年々に増大の形勢（時に收益増加率の遞減ありと雖も）を見つゝある時に一般小賣商の營業状態は如何あらうか之に就ては東京商工會議所の調査によると東京市内の小賣店數は震災前（大正十一年末）に合計五五、四二二軒を算へしものが震災後（昭和三年末）には合計五一、四四三軒となつて實に約四千軒の激減となつてゐる尙右の數字は震災前にその店舗數の不明であつた所の茶、洋服、漆器の小賣店は震災前には存在せざりしものと假定しての計算であつて右の三種の小賣店舗の軒數が大正十一年末に於て昭和三年末現在と何等の増減なかりしものとすればこの期間の小賣店舗の軒數の減少は實に六千五百軒の多



數に上り毎年約一千軒の小賣店が東京市内から減び行きし譯である。

無論右小賣店の減少の因が必ずしも百貨店の存在發展の爲のみと考へる事は行過ぎたる毀りを受ける事と思ふが少くとも百貨店の擴張進出其事が相當有力な因を爲すものである事は想像するに難くない。

#### 四、何が百貨店をして繁榮せしめたか

思ふに百貨店が今日の繁榮を來したについては其觀點の相違に従つて種々に考察する事が出来るだろう。

然しながら窮極する所經濟社會の變移發達並に之が發展過程に順應し忠實ならんと努力したる經營者の苦心が相俟つて今日の盛大を致したものと云ふ事が出来る、即ち百貨店なる小賣配給機能の發生發達を促進せる外部的事情と之が發展のプロセスと良く歩調を一にした内部的事情の兩因を見逃す事は出来ない。

今日でこそ一、二郊外鐵道の終點にビックストアを見るに至つたが從來は皆都市の中心地の而も小賣商店街の眞中に出來たものである。とまれ交通要衝の地を占むる事が必要條件の一つである譯である。従つて都市のどの地點より買物に出かけるにも最も都合がよく而も店舗は近代的宏壯を極めた建築にして内部は之に相應しい凡ゆる文化的設備を施して居る假令はエスカレーターやエレベーターは言ふも更なり寒ければやれヒーターやステイムと暖房裝置手ぬかりなく著ければ扇風器で涼風を送りそれでも足らぬと見たら眞四角な氷柱を立てる。休憩室では香高きお茶の接待を受けるところ言つた歡待振り、店内には多種多様の商品が而も豊富に陳列されてゐる。勿論専門小賣店に見る如き深さもなければ味もないが、その代り淺く廣く何でもござれと言つた調子である購買には洗練された店員が丁寧懇切を極め飽くまで顧客を満足せしめねばやまぬ應接振を示して呉れる店內では絶へず書畫骨董品其他各種の商品販賣の宣傳を兼ねて季節々々の催物をや

つて居る。出人には送迎用の自動車か足を助けて呉れると言つた様なわけついで客にしても買ふ氣は無くとも遊覽氣分で出掛ける見て居る内についで買ふ氣になつて財布の底をはたくと言つた様な事になる。

彼大正十二年の震災あつて以來百貨店の營業政策も一變し從來の高踏的態度を更め一般大衆を目指して出来るだけ安價に而も出来るだけ品質のよいものを提供するやうになつて來た事は時勢の然らしむる所であらう事實百貨店では大資本を擁して居るので一度に大量の仕入も可能なれば勢ひ販賣價格は低廉なる可き譯である。さては商品券を發行する事によりて受け得る利益等種々の内面的直接的利益を考へる事が出来る。

次にかゝる直接的利益と夫が改善を刺戟したとも見る可き間接的原因については必要にして充分なりと考へらるゝイバン、ライト氏の所説を左に便宜的援用する事にしよう。

一、過去二十五ヶ年に亘りて小賣業の發展に大なる効果を與へたものは見る人によりては多少異なるかも知れぬが先第一に過去二十五ヶ年に亘れる電氣鐵道の驚く可き發達及び擴張がビククストアの發達集中に一大要因を爲す勿論、斯るストアは開初當時より發展の信念を以て事に當り通常以上のエネルギー及巧智を有し顧客對しては出來得る限りの洗練された接待振を以て臨んだ事は考へられるが、さは言へ地下鐵道や改善された郊外鐵道がなかつたら今日の如く大きな且立派なストアがそうたんとは無かつたに相違ない、若し今婦人が買物をすると言ふのに突然現存の華かな利便から取り去られたとしたら——交通の點のみではなく各種の新しい而も大量の商品の分配から——夫は非常な不幸な事に違ひない。さすれば近くの小さい店が榮える事にならう而して婦人達は近所の小さい店がなくてはやつて行け無き事となる、とまれ大きな中央のストアは現時に於ける重要な教養機關の一つでもある、然も之が發達の主要なる勢力の一は上述せる交通

機關の便益でなければならぬ。

二、次の重要な原因は制度の確立及組織の優秀な事である。即ち客に對するサービスが優れて居るのは個人のサービスが優れて居るからと言ふわけのみではない勿論使用人の個々の能率増進が大ストアの經營者にとりて重大な問題には違ひない、然し總ての仕事を優秀な卓越した店員がやらねばならんとしたら數千の人が必要な大ストアではとても難かしい出来ない相談である。従つて取扱つて居る大量の商品を經濟的に分配する事は不可能である、個々人の卓越又はインテリгент、イニシヤティブと言ふものに對しては常に夫相當報はれるものでビツクストア位有爲の人を待つ所は他の何處にもない更に管理は尙卓越せる制度組織と共に重大なる要因である、即二十五年以前の進歩的商人・・・夫は自分の小さい仕事を育成する才能と先見を有し又使用人の中から眞の立派な商人を作り上げる事に才能並びに先見を期して居つた・・・は適當な時期に彼の使用人の中から卓越せるマネヂャーと管理者を見出した之等は餘り矢次早に入店して來るので自己の使用人だなど一見して分らない新入の店員を訓練する爲である。

而して吾人が絶えず個人の教養を圖り吾等に對する使用人の價値を増加するとは言へ成功の秘訣は全體的にも部分的にも非違を正し又は優秀な人的管理を施す所の卓越せる組織制度にある、使用人は常に出入する例へば大きなストアでは數千の若い婦人を使用して居る、然も(ショップ)ガールの全てはいつか結婚するものと推定される、少くとも大部分の女店員は結婚する、され過去二十五ヶ年間に百貨店の仕事に婦人が携つた事はビツクストア發達に大なる影響を與へたと言ふ事が出来る之等ショップガールの力強い助けが無かつたら大ストアは現在の地位を得る事は難しかつたに違ひない又女店員自身の立場から考へても間違ひもなく向上して教養されて來た少くとも一流のデパートのショップガール達は。

三、次の原因としては廣告術の進歩である事實上連續的の公開手段を取らな

つたらデパートの發達は實に遅々たるものであつたに相違ない特にアメリカのみを考察の對照に取つても日々の新聞を通しての公開が確にストア發達に重大なる意義をもつて居る比較的之等相關的の要因を想起す。即今日の新聞自體の發達而も之新聞紙の驚く可き奉仕特異の性質價格の低廉流布の驚く可き擴張はリノタイブ其他の不思議な器械に影響した今日のビツクストアと新聞とは其發達に於て互ひに原因となり結果となりて來た奇しき因果關係にある。尙以上の外に最一つ重大なる要因がある之は上述の諸要因と密接なる關係を持つて居る即ち製造業者と小賣業者の賢明なるコオパレーションである。こは製造業者が自己の製品の迅速にして且廣き販路を獲得する爲に都市の中央に位する大きな小賣業者を有力な味方たらしめた事にある今此處に兩者の相互扶助に關する興味ある話があるそれは製造業者の手許にある大量の商品をはかす能力を有して居るものは大ストアである又ビツクストアの方にした所で普通の取引の上に見る邪魔がなくて一日か二日の短時日で數千の服にしる胴衣、萬年筆、レザー、靴、靴下にしる凡ゆる其他の商品の調達に當つては製造業者の方でわけなくやつて呉れる大ストアの通俗化には一つの大勢力として製造業者は働いて居る (Reading of Marketing Principles 1936)

彼我社會進度の差こそあれ交通機關の發達、卓越せる制度組織の確立、廣告術の發達、生産者と小賣業者の協同行爲等が前述直接利益を刺戟助長して今日の如く百貨店隆昌の結果を將來せるものと見る事が出来る。

尙更に根本的な看方によれば之があるが爲に上述諸因の發達進歩を促したとも云ふ可き都市人口の急激なる集中化の傾向を擧げるべきであらう。

## 五、都市人口への一瞥

思ふに近世に於ける機械文明の異常なる進展は産業の發達擴張を促し産業の發展は勢ひ都市人口の加速度的集中増加を來し夫は曠て之が生存に必要な物資の

多量にして迅速なる需要を喚起しこは延いて交通機關の進歩改善を促しかつては之等諸因が互ひに原因結果となり今日の如き産業の極度の進展消費市場の開拓擴張大規模なる小賣配給機構の必至的存在を結果するに至つた譯である換言せば都市の發達擴大と百貨店の繁榮増大とは併行線上進んで來たものであると云ふ事が出来る少くとも今日迄の百貨店に就て見れば・・・この事は十九世紀の半頃早くも百貨店の發生を見同後半には完成繁榮の域にあつたと云はれて居るアメリカに就て見れば最も明に看取し得る事實である。

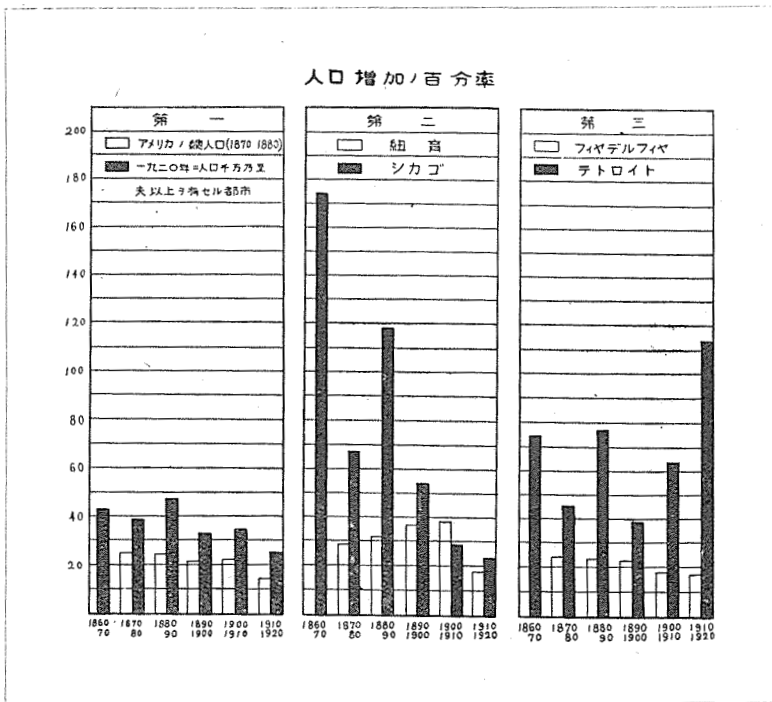
今一八六〇年以後のアメリカに於ける十萬乃至十萬以上の人口を有する都市の發達増加を示せば次の如し。

(米 國 都 市 發 達 表)

年 代	一八六〇	一八七〇	一八八〇	一八九〇	一九〇〇	一九一〇	一九二〇
人口十 萬以上	五	七	九	一一	一七	二二	三五
二十萬以上	一	四	四	八	八	一〇	一一
三十萬以上	一	一	三	一	四	七	五
四十萬以上	一	一	一	三	一	三	四
五十萬以上	一	一	一	一	三	三	四
六十萬以上	一	一	一	一	一	二	一
七十萬以上	一	一	一	一	一	一	二
八十萬以上	一	一	一	一	一	一	一
九十萬以上	一	一	一	一	一	一	一
百 萬以上	一	一	一	一	三	三	三
都 市 數 合 計	八	一四	一九	二六	三六	五〇	六八
						七九	

右の表によりて大小都市の分布を見る事が出来るばかりでなく又一八六〇年以後の都市數の發達も窺ふ事が出来る即一八六〇年に十萬以上の人口を持つた都市が八個あつたのが今日八十近く迄増加した事を示して居る此の事實は同時に此期

間内に於ける百貨店の發達に對する或示唆を與へるものがあらう。  
更に次表は一八六〇年より今日に至る大都市成長の觀念を與へるものとして最も期待すべきものであらぬばならぬ其第一は一九二〇年に於ける人口十萬を擁する都市と之に對して全アメリカに於ける人口の増加歩合



との比率である之によると一八六〇年から一八九〇年へかけて大都市の増加歩合

は各十年毎に四四%であつてに反し全米の人口の増加は僅かに二六%に過ぎなかつた事が分る。この状態は既存の小賣組織の素暗しき發達を促すと共に新なる小賣業の増加の必然性を裏書して居る更に一八九〇年から一九二〇年へかけてアメリカ全土の人口の増加は十年毎に平均十九%に達したに比し同期に於ける大都市の増加歩合は平均各十年毎に三一%を示して居ると云つた具合である。

更に次の第二、第三は人口増加に關して特別な都市に存する相異點を示して居る、之等の相違點が今日の百貨店の發達の上に大きな結果を持つて居るだらう事は言はずもがなである。

今經營費の研究に就て爲されたハーバード大學の商業研究所の調査によると一九二五年度に於て一年百萬弗乃至夫以上の賣上を爲す百八十三個の百貨店に就て見るに其殆んど三分の一は人口十萬以下の都市に存在して居つたと言ふのである。こはアメリカの小都市に於て營み得る賣上額の限界を示すものと云はれて居る。

翻つて然らば我國都市人口の増大集中化傾向は如何あらうか之に就ては前述せる如く現存我國百貨店の多くが大正八九年又は夫以後の創設にかゝり先進諸外國の夫の如く飛躍の歴史的期間を有せず従つて都市人口集中化の現況を窺ふを以て充分なりと考へる。

昨昭和五年一月施行國勢調査に従へば我國内地總人口六千四百四十四萬七千七百二十四人に對し都市人口總數は千五百四十四萬二千二百十五人にして全體の二二、三%に該當して居る、従つてこの都市人口を控除せる爾餘の五千萬五千五百〇九人は農山漁村又は他の町村に住居せるものと看する事が出来る。都市人口の之に對する比率二八、八%を示して居る之を更に人口數に依りて細分すると都市集計百九個の中五萬以下は三十五個、五萬以上十萬未滿は四十六個、十萬以上二十萬未滿は十九個、二十萬以上三十萬未滿は三個、六十萬以上七十萬未滿は一個、七十萬以上八十萬未滿は二個、九十萬以上百萬未滿は一個、二百萬以上二百五十

萬未滿は二個と云ふ勘定である。

此中十萬未滿の都市數は計八十一個にして其集計人口四百四十一萬二千四百七十八にして都市人口總數に對して二八、五%強を占め十萬以上の都市數は次表の示す如く二十八個にして其集計人口千百〇二萬九千七百四十五人となり都市全人口に對して七一、四%強を占めて居る更に之を内地總人口に對比する時前者は其數六、八%後者は其一七、一%夫々該當して居る。

次に之を人口六十萬以上を有するもの所謂六大都市に就て見ると其人口總數六百九十二萬〇五百三十四人となり都市全人口の四四、八%を占むる事となる換言せば我國都市全人口の二分の一弱は六大都市に集中されて居ると云ふ事になる而も之中大阪東京の二大都市に於

人口十萬以上の都市一覽表

昭和五年十月一日國調

都市名	人口數	都市名	人口數
大 阪	二,四三三,五九八人	東 京	二,〇七〇,五九八人
名 古 屋	九〇七,四〇二人	神 戸	七七七,五九八人
京 都	七五五,二四二人	横 濱	六〇〇,二六八人
廣 島	二七〇,五五八人	福 岡	三六二,五〇八人
長 崎	二〇四,二七九人	函 館	一九七,五三三人
吳	一九〇,二六五人	仙 台	一九〇,一七七人
札 幌	一六六,五五八人	八 幡	一六二,三六八人
熊 本	一六四,四九八人	金 澤	一五七,〇九八人
小 樽	一四四,八八八人	岡 山	一五九,三三人
鹿 兒 島	一三七,三三人	靜 岡	一五八,六二一人
佐 世 保	一三三,一七八人	新 潟	一五五,〇六八人

堺 三〇、三七人 和歌山 二七、三七人  
 横須賀 二〇、三〇人 濱松 二〇、四五人  
 門司 一〇、三七人 川崎 二〇、四五人  
 其人口集計四百五十二萬四千〇九十八人を數へ都市人口總數に對し二九、二%を占む即都市全人口の三分の一弱が二大都市に集中した事になる。  
 以上で我國都市人口靜態の一般を明にしたわけであるが更に須要都市に於ける人口動態諸相に就ては如何あらうか。

之に就ては次表の示す如く東京市は大正十四年の國調に比較して最底の七萬四千九百六十二人と云ふ實物増加を示し大阪市は最高の三十三萬八千七百六十五名と云ふ實數増加を示して居る増加比率に於ては最底の

昭和五年國勢調査速報(内閣統計局)

市名	世帯總數	人口の増減(△、減)		人員割合%	人員割合%			
		大正十四年人口	昭和五年人口					
東京市	414,630	2,070,529	1,995,567	2,173,201	74,962	938	△177,634	△ 82
名古屋市	190,379	907,402	768,558	608,127	138,844	181	160,431	234
京都市	162,075	765,142	67,963	591,323	85,179	125	88,640	153
大阪市	541,033	2,453,569	2,114,804	1,768,295	338,765	160	346,509	196
神戸市	178,327	787,596	704,375	644,471	83,221	118	59,904	93
横濱市	135,929	620,296	515,077	502,413	105,219	204	12,564	25

東京市の三、八%から最高の横濱の二〇、四%がある次に大正九年より同十四年に至る人口動態を見るに東京市にありては實數十七萬七千六百三十四名其比率に於て八、二%の減少を示して居るの外他の都市は夫々比率に於て二、五%——二六、四%の増加を示して居る之は東京市の減少は例の大震災の一大打撃に依る

回復未だ爲らざる爲と考へらる、とまれ之によりて特別なる異變なき限り我國須要都市人口は順調なる増加のコースを辿つて居る事を知るであらう。  
 以上で我國都市人口特に須要都市に於ける人口動態の概況を盡した譯である然らばかゝる都市人口の集中増大傾向に對して現在百貨店との數的比例はどうあらうか、今六大都市に就て見るに左表の如し。

都市名	人口數	百貨店名及數	一店當人口數
大 阪	二,四三〇,五九人	大丸、三越、白木屋、高島屋、松坂屋、十合、阪急	七 三〇、〇六人
東 京	二,〇〇〇,五九人	三越、松屋、松坂屋、高島屋、白木屋、ホテイ屋	六 三〇、〇六人
名 古 屋	九〇〇,四三〇人	松坂屋	一 九〇、〇六人
神 戸	七七〇,五九人	大丸、三越	二 三八、五九人
京 都	五五〇,四三人	大丸、高島屋、物産館	三 一八、五九人
横 濱	三〇〇,二五人	野澤屋、鶴屋	二 一五〇、一六人

備考 之に掲載せる百貨店は東西百貨店協會加盟のものにして其他の規模小なるものを含まず。

之によりて見れば大阪東京始め神戸横濱は夫々一店當り三十萬乃至四十萬の範圍内にあり、京都稍々下りて二十五人強を示して居る、名古屋は伊藤松坂屋が傳統的暖簾の強み誇かに獨占状態を示して容易に他店の介入を許さざる有様である無論より實際的な意味に於て夫々の都市へ日々各種の交通機關の便を藉りて郊外地から流動する數萬乃至數十萬の人間を考慮しなければならぬ。こは交通機關の發達した大都市に於ては他の群小都市に比較して遙かに其數の著大なるを思はしむ従つて前表一店當人口數は更に増加を見る事になる譯である今大阪市を例に取るに次の如し。(大阪都市計畫課調査昭和五年十一月一日)

各郊外電車一日乗降人員總數百十四萬九千四百四十五人

内 譯 阪神本線乗降總數 一〇三、九九九人

阪神傳法線	九、九五八人
阪神國道電車	二五、一一四人
阪急寶塚線	一四三、三六九人
阪急神戸線	九、三二一人
京阪電車	一〇〇、六七二人
新京阪電車	五一、〇一八人
新京阪千里山線	二一、七二四人
新京阪十三線	一一、九二四人
大軌電鐵	一二八、一四五人
南海本線	二二五、三九七人
南海高野線	二一、三七七人
阪堺線(南海支線)	七一、五六五人
阪堺高野線	三二、三七一人
阪和電鐵	二九、四五八人
大鐵	四四、五三三人
阪堺	一四、二八九人
省線大阪驛	五五、七六〇人
省線片町驛	七、九五三人
省線京橋驛	一六、五三三人
省線天王寺驛	二〇、〇二一人
省線湊町驛	五、三一六人

今大様半數の降車と見れば五十七萬人餘が市内に流動した事になり、大阪市内口數は三百萬突破と見る事が出来る従つて一店當り四十萬を超過する事になる、この事は他の都市に於ても數の上に大小の相違こそあれ同様に云ひ得る事である今アメリカに就て見るにシカゴは人口三十萬に對し一店、費府は二十萬に對し一

店、紙育は十七萬に對し一店、ボストンは十三萬に對し一店と言はれて居る、勿論彼我社會經濟事情を異にし従つて一人當購買量の上に相當の開きある事は考へられるが上述對人口比の上から見て我國百貨店今後の伸張性に對し或觀念を與へるものたる事は間違ない。

## 六、結 論

上來縷説の事情の下に繁榮の現段階に達した我國デパートにも之を廻りて解決を要す可き種々の問題が繼起するに至つて百貨店自體の問題としては百貨店の獨占的勢力特に取引條件及び價格の問題がある兼併の問題とか復數商標問題、商品券問題、百貨店課税問題所謂廣告料問題所謂不當廉賣問題所謂職人争奪問題なども之に屬するものである。

百貨店對小賣商の問題としては出張販賣問題郊外出張問題通信販賣問題同業組合加盟問題老舗收容問題百貨店網問題の如きものがある。

更に百貨店業界自體の問題としては定休日問題店內衛生問題催物政策問題流行政策問題賣價政策問題信用貸統制問題共同配送問題百貨店同業組合問題等がある(百貨店形態の性質平井泰太郎)殊に商品券問題の如きに至りては其性質上百貨店自體に關するものなるに拘らず現下の苦境打開に急なる一般小賣業者達によりてアンチ百貨店熱を煽る好餌として逆用され實質以上に大きく社會問題視され抗争されたかの觀がある其結果社會政策的意味を多分に加味した商品券課税と迄進展し現に東京市に於ては昨年八月より課税實施を見更に大阪市に於ても課税實施を取急いで居る有様であるこの事は神戸京都市に於ては同様計畫中と聞く。

然らば當面の小賣業者は素より一般社會人に對してかくも衝動を與へた百貨店の商品券發行の實情は如何あらうか。

之に就ては各百貨店の商品券發行高は極秘にされて居る事とて其正確なる内容

を握る事は不可能であるが、先年東京商工會議所聯合委員會の席上小田久太郎氏の言明される所によれば一年通算四千萬圓と言ふ事である。

無論これだけの商品券が常に現存して居るのではないが百貨店協會の調査書に従へば商品券の一ヶ年回轉率は六回四分（一回轉平均日數五十七日）であるから假りに一年に六回々轉するものとすれば商品券の常時流通高は六百六十六萬餘圓となる、そして八個の百貨店の資本金は四千五百十四萬圓であるから資本金の約七分の一の商品券が常時に流通して居る譯である。更に各百貨店の商品券の發行高と其商品保有量に對する割合を見るに百貨店の商品券が如何に重大な役割を占めてゐるか一層明瞭になるであらう。

百貨店	商品券發行高	商品保有量に對する割合
三越	七、八〇一	一二〇%
白木屋	五七一	一四
松屋	一、八〇一	四八
大丸	一、四〇五	三二
高島屋	八〇四	二八
松坂屋	四、七六六	一三七

(註) 經濟時報第一卷第四號竹島富三郎

かくも百貨店經營上重大なる役目を爲す商品券の發行基數は如何、今便宜上昭和五年下半年の大阪百貨店協會の調査書によれば次の如し。

一、商品券一枚當	拾四錢七厘
内譯 原紙及印刷代	二錢〇
印紙	三、〇
桐箱及ボール箱代	三、五
紙水引代	一、四

配達費	一、三
係員諸給與	三、一
事務用品	一
其他諸經費	三

一、一枚平均金高	四圓八拾五錢
一、一ヶ年回轉率	六回一四分一回轉平均日數五十九日半
一、毎月平均殘高	一ヶ年發行高 一六、三%
一、經費の對發行金額	三、〇四%
一、經費の對平均殘高	一八、六%

之に依りて見れば商品券一枚當金額五圓を出せず而も之に要する經費三、〇四%に當り回轉率六回として一年通算一八、二四%に達し商品券による顧客に對しては二〇%近くの特別割引をしてゐる事になる。

今假りに百貨店の賣買差益一五%として凡ての顧客が商品券を用ひるとすれば百貨店の營業は不可能に墜いる事にならうと言ふものである、最も茲に留意すべきは前掲基數は發行高百萬に對する七百貨店平均歩告にして更に其發行高が遞増する場合には經費歩合は反比例して低下するの理でもあり、殊に一枚當拾四錢七厘の經費中には印紙稅參錢を含んで居るが、どの百貨店にも最も多く流通して居ると考へらるる、壹圓未滿の小口商品券には印紙稅不要なる故旁々一枚當經費は更に低下する事が推察される。

要するに商品券を發行する爲に相當の經費を要し従つて商品券發行に基き受け得る無利子の資金もその利廻は必ずしも多大に上らぬにしても尙商品券を發行する爲に受け得る其他の利便から見て商品券發行は百貨店に取りて決して不利なるものと考へる事は出来ない。

かゝる發展途上に横はる數々の問題を控へて我國百貨店は何處に行かんとする

かと言ふ事は當業者は素より一般世人も共に興味深き所であらねばならぬ。

思ふに我國百貨店は其出現の當初に於ては多分の貴族的贅澤臭を有し一般消費層に取りては及ばざる虚榮慾を唆らるゝ以外無縁の場所とさへ考へられて居つたのである。當時うたわれた今日は帝國劇

日は三越の名文句は都會文化の先驅を爲す百貨店の社會的價値を表して遺憾なしと言ふ可きである。

かゝる高踏的商内から民衆的商内へ高級贅澤品より實用必需品の安價提供へさへはアメリカのウールウオース十仙五仙均一店を模したと考へらるゝ五十錢一圓下りては十錢均一へと我國百貨店の現在は其經營方針を旨まぐるしく轉化して行く否より嚴密なる意味に於ては社會の生長に伴つて變移せざるを得ない状態に立ち至つた譯である。此處に於て前述せる各百貨店の華々しき増築擴張さては全國的支店分店の新設諸相こそ繁榮の裏にしのびやかに迫れる經營受難を有利に展開せんとする一企劃に過ぎないと見る向もあるわけである。之に就ては實際家の北田藏司氏の言として傳へられて居る所を摘記すれば今日アメリカに於てはチエンが進み専門店が進歩した結果上と下から押へられて百貨店の伸張力が鈍つた事は事實であるが之事を以て我國百貨店の行詰りを説くのは早計である。



### 再建された

### 沙翁劇場

一九二六年の三月六日失火のため焼失したシェイクスピア記念劇場は、各方面よりの寄附金で再建の運びとなり、いよくその竣成を見たので、四月二十三日のシェイクスピア誕生記念祭當日盛大な開場式が擧げられ、「ヘンリ四世」劇がその最初の舞臺を飾つた。同劇場は懸賞で設計圖案を募集した結果、英國婦人エリザベス・スコット嬢の考案になる設計を選んだもので、英國人の所謂「モリス」色のガツレリとした矩形の大建物は天の一角を劃し、舊劇場をも髣髴たらしむるご共に、近世式の劇場として申分のないものである。

我國はチエンも専門店も米國程に進んで居らないから上へも下へもまだくく伸びる餘地がある時勢に應じて大衆的商内をすれば前途は毫も悲觀するに當らないと言ふのである。

が此處に留意すべき事は假令チエン其他の外部的脅威が加はらなくとも或一個の社會に於て而も一個のビルディング内に於ける成長の限界は丁度一町歩の土地から小麥の收穫を増さんとするが如きものにて其處には收穫漸減の法則が作用すると云ふ事である、無論より以上の増加を圖る爲により以上の努力と資本を投ずる事は必要であり收穫漸減の法則に達する事は結構な事であらねばならぬ然し乍ら一度彎曲せる上に連續的に進行を策する事は餘り賞めたやり方ではないと言ふ事である。

この事は百貨店當業者を促して勢ひ百貨店自體の擴張増大乃至百貨店間の合同を將來し或は最近問題の所謂百貨店式チエン化の如き従来の經營態様に變化を見せる事にならうと言ふものである。この事は先く諸外國に於ける如進産業革命の

(一九三二・五・一五)

有効なる限り不可避の事實であらう。  
本稿執筆若小林三郎氏は大正十四年本學法學部出身、阪急百貨店教育係主任たりし人、現在は同百貨店總務課に勤務せらる。

一(編者)



# 價値不必要論

—Gustav Cassel の價格論—

大學院學生 經濟學士 佐伯三郎

## 目次

- (一) 序 題
- (二) 不必要なる價値論
- (三) 價値論から價格論へ
- (四) 價格論の提唱 (以上前號所載)
- (五) 價格の形成過程
- (六) 稀少性理論
- (七) 結 論
- (五) 價格の形成過程

前項、即ち「價格説の提唱」に於て述べたる如く價格論は、進歩的經濟學 (Progressive Economics) に於て、從來占めてきた價値論の地位に代つて、指導的地位を占むるに至り、經濟學の研究に於ては、凡ゆる研究に先立つて研究せらる可き課題となつた。この價格論 (Theory of Prices) の説明は、先づ第一に價格形成過程 (Price building process) の研究を必要とする。こゝに、極めて暗示的であるが、G. Cassel に従つてその一端を窺つて見よう。

價格形成の過程即ち、價格決定の道行きについての研究は、諸多の學者によつて種々の見地から行はれて

ゐる。生産費説に於ては供給の建前から、限界効用説に於ては需要の建前から、折衷説に於ては供給と需要との均衡點から起して部分的均衡に至る。この際見落すことの出来ない點は、その背後に價値の問題が基礎をなしてゐることである。

G. Cassel の建前に於ては、價値は捨象され、①古く D. Ricardo (1772—1823) に於て價値論の説明に用ひられ、②新しく W. Lexis に於て稀少性なる言葉を拒否して、經濟的制限なる用語に於て用ひられた所の稀少性原理 (Scarcity principles) は、いみじくも新しき衣裳をまとはしめて、價格論の裏に潜在的なる姿を以つて働きかける一新原理として導き入れられてゐる。

故に G. Cassel の價格論を理解するためには、何をおいても先づ最初に、稀少性原理の意義を把握せねばならぬ。然る後、その上に築かれたる價格形成の方程式 (Equation of price building) の研究が必要である。

即ち第一には、價格の最小的形成過程たる進歩なき經濟社會を對象となる靜態的形式 (Static form) が確められ、次に第二には、抽象的なる價格形成の研究である靜態的形式の基本的組織 (Fundamental System) から、複雑なる價格形成の進歩的經濟社會を對象とせる

動態的形式 (Dynamic form) への道行が研究されねばならぬ。

稀少性理論は、前述の D. Ricardo 及 W. Lexis の經濟學に表れ来る如く單に一少部門の補助的説明と比較し得るものではない。G. Cassel 經濟學に於ては、その學問的構成の全分野に亘つて廣域的に理論的根據をなしてゐる。故に次項に於て「稀少性理論と機能」なる一項目を以つてその説明に與へる豫定であるが、價格形成に参加する重要な一法則として之を見れば、凡そこうである。

我々の考察の對象となる、現實の經濟社會に於て、財貨が價格形態をとつて表面に浮び上るのは、その背後に、凡ゆる財貨に於ける稀少性 (Scarcity) なる一法則があるが故である。即ち、一般財に於ける價格構成は財貨の稀少性であり、財貨の供給 (Supply of goods) が、財貨の需要 (Demand of goods) に對して制限的であると云ふことが、最重要なる意味をひめるのである。

ある制限されたる財貨の供給に對して、無制限なる人類の需要を、統制し行くと云ふことは、③一つの家族に於ては家長の意志 (Will) であり、共產團體に於ては、その支配者の意志であり、自由主義的に組織せられたる交換經濟 (Exchange Economy) に於ては、財貨に附せられたる價格である。故に、現實の經濟社會に於ては、この意味に於ては、價格は、需要と供給との支配者であり統制者であると云ひ得る。

即ち、價格は制限的なる財貨の供給に對して、無制限なる需要を調整し行くと云ふ機能を營む任務を有するのである。従つて、財貨の價格決定 (Price fixing)

と云ふことは、その財貨の價格を支拂ひ得る需要のみが満足せられ、價格を支拂ひ得ざる凡ての他の需要が切りすてられると云ふこととなり、よつて需要は制限せられて、供給と合致するに至り、價格もこの程度に照應して定まると云ふことになる。

斯くの如く、價格論は本質的に財貨の稀少性と云ふ問題に依存してゐる。この基礎の上に立つて價格の一般決定の方程式が成立する。この基礎的理論なくしては、G. Cassel の價格理論はその本質的特色を失ふ。一見ありふれたる單純なるこの原理が、彼の經濟學に於て抜きすて難き重要部分であり、その理論構成の特色をなしてゐる。この問題に對する批判は後に譲ることとし、價格形成過程の出發點を見出したる吾人は、次に彼の方程式に移らう。

第一には、最も單純なる價格形成過程たる基本的組織 (Fundamental system) 即ち、そこでは、一切の經濟的進歩が静止せるものと假定せられたる、靜態的經濟 (Static Economy) に於ける、價格は如何にして決定されるか。そこでは、④財の供給と需要とが一定せるものと假定し、而も一切の經濟的進歩が停止するものとする。

かゝる靜態的經濟に於ては、財貨に價格が定められるや否や、需要者は、その需要を如何程充たさんとするか、即ち財貨を幾何購買せんとするかを知ることが出来る。そはやがて、財貨の各々に對する社會全體の總需要を知ることが出来る。この需要總高は、平衡狀態 (State of equilibrium) の下に於ては、供給總高と一致する。かくて我々は、これ等の條件や方程式を知ることによつて、價格が財貨の稀少性に照應すること

を學び得る。

以上は、理論構成に於ける諸條件の同一なる場合、即ち財貨の供給と需要とが一致する靜態的形式に於ける價格形成の考察であるが、この單純なる價格形成に於ける基礎的價格方程式 (Fundamental price system) が確かめられたる後は、財貨が生産せられる場合、その財貨の生産に共働する所の、基礎的生產手段が如何にして、稀少性原理 (Scarcity principles) によりて、説明せられるかを考察せねばならぬ。

即ち次に、稀少性原理 (Scarcity Principles) によつて價格が形成される複雑なる方程式と見るに、前例に於ける財貨の供給が一定してゐるとの假定をすて、之等が生産されてゐると云ふ事實を考慮せねばならぬ。ここでは、財貨が生産され得るのであるから、その絶對的稀少性 (Absolute Scarcity) が存しなくなる。この場合には、乍而、それ自體は生産され得ない基礎的生產手段 (Elementary means of production) の稀少性と云ふことに歸屬し來る。この場合は、前例の場合と同じく稀少性が、生産手段の價格の上に支配し來るを以つて、原理の適用を妨ぐるものではない。

⑤實際上、生産されたる財貨に對する需要は、ひいては結局その生産財貨の生産手段、即ち先づ中間生産財を通じて、最後には基礎的生產手段に對する間接的需要となる。従つて、最終點にある基礎的生產手段の稀少性と云ふことが、出發點に於ける完成財貨供給の稀少性と云ふことに反射的作用を働くものと云ひ得る。故に、それぞれの生産手段に對して、或る價格が存すると假定し、完成財貨の生産に之等生産手段のとれだけが必要であると解れば、完成財貨の價格は算出し

得ることが出来る。その時、完成財貨の供給者は如何程供給あればよいかと決定することが出来、又需要者は之によつてその需要額を定めることが出来るのである。加之、これによつて完成財貨の生産に要する基礎的生產手段の數量と價格を定め得るに至る。

かくして、完成財貨の基礎的生產手段に對する需要は、終局的にその供給に等しい數を算出し得るを以つて、價格形成の過程に於ても、⑥第一に、完成財貨の稀少性によつて價格が形成せられると云ふ單純なる方程式が成立し、次に、それが生産に當つて、必要とする中間生産財を通じての最終的生產手段の稀少性と云ふことによつて、諸財貨の價格に對する全方程式組織 (Whole system of equations) 成立せられるのである。

以上の方程式組織は、更に一步を進めて、凡ゆる經濟現象が進歩して止まざる、繼續的進歩の經濟 (Continuous progressive economy) を取扱はねばならぬ。ここに於て、抽象的に考察せられたる靜態的形式 (Static form) は、財貨が將來の必要に應じるために生産せられ、それに共働する生産手段は現在の需要ではなく、將來性を持つてゐると云ふ時間的要素を考慮せねばならぬ。

ここでは⑦完成財貨に對する現在の需要は、一般に基礎的生產手段に對する現在の需要ではない。故に我々の研究對象を、繼續的生產過程 (Continual process of production) に向はねばならぬ。即ち、基礎的生產手段の繼續的供給を必要とする所の、完成財貨への繼續的需要を取扱はねばならぬ。又、この需要と、この供給との間に連なる關係を考察せねばならぬ。これ等の研究は、價格形成の複雑なる過程としての、動態的

形式 (Dynamic form) となる。

この動態的形式に於ける價格形式は、現實の欲望満足に照應するよりも一層大なる、供給を現在の生産力上に於て考察せねばならぬ。

かくの如き進歩的經濟の研究に於ては、起り得き需要に應ずるため、財貨の生産に對して、必なる、基礎的生產手段の連續的供給を取扱はねばならぬ。このことは非常に困難なる諸事情に遭遇するものであるから、抽象的把握は從來より困難視され來つたものである。が概念的には、左の劃一的進歩的經濟 (Uniformly progressive economy) の公式によるを便とするであらう。

この公式に於ては、現在需要と生産力の間に一つの率が存在すると見て、之を一般的に、劃一的に増加し進歩し行くものと見るのである。それと同時に、劃一的に増大する需要に對しては、劃一的に増大する基礎的生產手段の供給を要することを考へねばならぬ。かかる場合に於ては、一生産手段が、生産過程に導き入れられてから、完成財となつて需要者に達するまでの時間の問題を考へねばならぬ。

これ等の考察に於ては、現在の經濟から次の經濟へと進み行く、進歩の率 (Rate of Progress) を確定せねばならぬ。かかる進歩の率が決定されるか否や、完成財貨に對する價格形成は、先づ靜態的形式に於ける單純なる基礎的方格的によりて決定され、次には、それが生産される場合を考察したる基礎的生產手段の稀少性なる第二次方程式組織によりて考へ得られるのである。かくて靜態的形式から動態的形式への道行きがなされるに至るのである。而して價格形成過程の全般的方

式が成立するべきである。

(註) ① D. Ricardo: Principles of political Economy and Taxation: pp. 5—6.

② W. Lexis: Allgemeine Volkswirtschaftslehre: 1913.

③ G. Cassel: Fundamental Thoughts in Economics: pp. 83—84.

④ G. Cassel: *ibid.*: pp. 89—90.

⑤ G. Cassel: *ibid.*: pp. 91—92.

⑥ G. Cassel: Theoretische Sozialökonomie: ss. 115—143.

⑦ G. Cassel: Fundamental Thoughts in Economics: pp. 93—94.

## (六) 稀少性理論

以上に於て、簡單ではあるが、從來の經濟學に於て指導的地位を得てゐた價值論 (Theory of value) に對して、進歩的經濟學 (progressive Economics) に於てそれに代位すべき價格論 (Theory of Prices) の成り立ちを考察した。前項に於て述べし如く、G. Cassel 經濟學に於ける、價格論の道行きには、その背景をなし且つ支配的なる稀少性理論 (Scarcity principles scarcity) の黒幕がある。それは單に價格論に於てのみならず、彼の全經濟學の基礎的原理として、見落し得ざる項目である。

故に、彼の經濟學の理解には、是非とも稀少性理論を學ばねばならぬ。ここに彼の云ふ稀少性理論 (Scarcity principles, Principles of Scarcity, Prinzip der Knappheit) とは、我々の經濟生活に於て、必要なる財があ

る程度に稀少であると云ふことが本質的であり、従つて我々の經濟を必然的に經濟性ならしむるものであると云ふのである。この財の側に於ける稀少性が、經濟生活の實相であり、この不可避なる實相の上に我々の經濟一般が構築されてゐるのである。

彼が「社會經濟學」に於て云へる如く、①經濟的活動は欲望充足の可能性に制限があると云ふ、前提の下に行はる行為である、故に一切の經濟はこの稀少性原則の支配の下にある。と云ひ、又「經濟學の根本思想」に於ては、②經濟とは人類の必要を充足する手段が或る程度に於て、稀少であると云ふ條件の下に、これ等の必要充足手段を獲得することを意味する。として、我々の經濟學が稀少性原理の上に構築されてゐることを強調し、稀少性理論の理解が如何に必要であるかを述べてゐる。

この稀少性原理は、然乍、獨り G. Cassel の所産ではない。從來の經濟學者の頭に去來した問題である。古くは D. Ricardo (1772—1823) に於て、近くは W. Lexis に於てである。が兩者とも部門的問題として取扱つたのみであつて G. Cassel の如く經濟學全般の理論的基礎として、統一の見地に立ち一貫して取扱つたものではない。寧ろ一度び經濟學の組上に乗せつゝ之を最後に拒否し終つた、註未解決のものである。之を救つて理論的に統一の見地より検討し、一つの學問的體係として構築したことは、いみじくも G. Cassel 經濟學をして特色付けるものとした。

以上は、稀少性理論が有つ經濟學全分野に於ける意味であるが、更に彼の價格論に於ては、價格形成に働く稀少性原理の支配は強力である。即ち、前項に於て

述べたる價格形成過程の全方程式組織は、根本的には我々の經濟生活に於ける、必要手段たる財貨の供給が之を求むる側の需要に比して稀少であると云ふ點に意義を有してゐる。この本質的概念、即ち需要に對して供給される財貨が稀少であると云ふ概念の下に價格構成が行はれるのである。

實際、人類の經濟生活に於て、欲望に充たす對象物が、或る程度に稀少である限り、欲望を制限して、供給と一致せしめる方法をとらねばならぬ。この問題は自給自足的なる共產經濟に於ては、その支配者の手によつて行はれた。これと同様な形式に於て、共產主義的なる社會に於ては、ある統制機關の手によつて行はれるであらう。而るに、現代の經濟生活に於ては、この統制機關が存しないから、他の方法によらねばならぬ。この調節する統制機關の機能に代る役目を擔ふものは價格である。

一度財貨に或る價格が定められる時その價格を支拂ひ得る需要のみが欲望を充たし、その價格を支拂ひ得ざる、準備整はざる需要者は切りすてられる。かくして、制限的なる財貨の供給に對して、無制限的なる需要が統制される。一切の需要は、この價格への依存と云ふ形式に書換へられる。こは又、他方に於て一切の財貨供給は、價格への依存と云ふ形式に書換へられ價格形式に於ける全方程式組織を可能ならしむる基礎的要素となるものである。

稀少性理論の價格形成に働きかける形態を捉へて、價格方程式組織を組み立てる考方に於ては、③第一には新しい、費用の概念に導き費用説の(Cost Theory)缺點を正し、④第二に於ては、効用説(Utility Theory)に

於て、説き難き説明への新しき基礎を與ふることとなる。即ち、前者にありては、價格形成に於ける一方の側、即ち供給の側に於ける價格法則、云ひ換へれば、費用を投するが故に價格が成立すると云ふ一方的の考へ方に捉れた。又、後者に於ては、需要の側のみを考ふるに急にして、他の側面を忘れ勝ちにすると云ふ研究に没頭した。

稀少性理論の考察方法に於ては、この兩者の陥れる一方的見方を救ひ、それ等の各々に新しい理論者基礎を與へる。即ち第一には、價格を支拂ふが故に、費用を投する、この場合從來の費用概念と異なるは、費用が貨幣に表現せられ、完成財を通じて、各生産要素に對して支拂はれる價格であると云ふことである。第二には、財貨が經濟生活の必要手段として、有用である故に價格を生ずるのではなくして、稀少性なるが故に價格付けられるのである。これは、一見單純なる見方であるが、價格現象を分析して、その奥にあるものを探求し行く時、必然的に到達し得可き基礎的原理である。この基礎的原理は表面的ではない、潜在的なる形に於て働きかけてゐるものである。この財貨の稀少性、即ち經濟生活に於ける欲望充足手段の或る程度に稀少なると云ふことが、經濟學に於ては、根本概念であり我々の經濟生活公然的に經濟性たらしむるものである。故に、この原理こそ第一義的に、經濟生活を支配する中樞の根本概念たるものである。

稀少性理論を用ふる利益は、價格論のみに於て計りではない。經濟現象を取扱ふ一切の問題の下にあつて重要なものである。即ち貨幣理論に於ても、一切支拂手段の稀少であると云ふことが、その本質的基礎であ

り、資本利子論に於ても、資本の供給が、需要に對して或る稀少程度に置かれてゐると云ふことが、根本的に決定的意義を有つのである。斯くして G. Cassel の經濟學に於ては、この原理は價格論を始めとして、その全分野に亘つて、最も中樞的指導原理をなす重要な概念である。

(註) 財貨が稀少性によつて經濟學の考察の下に來ると云ふのは D. Ricardo によつては "Principles of Political Economy and Taxation, 1817. に於て" 勞働を投しても任意に増加し得ざる財貨の價值は、稀少性によつて決定されるが、かゝる財貨は經濟學の本質的對象ではない」として之を捨象し、近く W. Lexis に於ては "Allgemeine Volkswirtschaftslehre, 1913." に於て「稀少性と云ふ言葉は正しくなく、經濟財の無制限に存せざる、且つ費用を拂はざれば得難き性質は、之を稀少性と名付くるより經濟的制限とすべきである」としてこの語の用法を正してゐる。

- (1) Gustav Cassel: The theory of social Economy, p. 7.
- (2) Gustav Cassel: Fundamental Thoughts in Economics; p. 83.
- (3) Gustav Cassel: ibid, p. 116.
- (4) Gustav Cassel: ibid, pp. 110—111.

## (七) 結 論

以上に於て、資本主義的經濟(Capitalistic Economy)の下に於ける經濟理論構成に精進しつゝある一群の學者によつて試みしある價值不必要論(Non-Value

(Theory)の代表的學者として、輝く名星 Gustav Cassel の價值論を否定せる理論的構成及それに代位して、經濟生活過程の指導概念とする價格論の概論的説明をなし來つた。全く素描であり且つ一通りの説明である然し最も重要と思はれる部分は、残りなく取扱ひ終へた積りである。最後の稀少性理論(Scarcity principles)の説明は、直接的には本論の目的ではないが、彼の經濟學就中價格論の理解には、抜きすて難きものである。

全般的に價值不必要論は、經濟理論構成に於ける便宜の問題である。成る程現代に於ける經濟生活は、貨幣を以つて表現される價格の支配下にある。そこでは凡ゆる經濟現象は價值の世界に非ずして、價格の世界である。かゝる社會を對象とする限り、經濟學は必然的に價格經濟であるから、その指導的概念も價格論となるであらう。これは外觀的には一應許容される至當なる行程である。乍然、今一步を進めて經濟學の研究視野をその内奥に向つて進めるとする。例へば、現代の經濟生活が價格經濟であるとし、そこでは價格の支配が認識されるから、價格論を以つて經濟學の嚮導概念とする。と云ふのを今一步進めて、その背後に抉出すべき何者かを探究する。價格支配と云ふ現象下に於ける、潜在的なる實相を把握せんとする。こゝまで研究視野を貫き行く時、その價格支配を必然とする何ものが抉出し得られるであらう。

この問題に對して G. Cassel は、一方に於て從來の經濟學者によつて、長い間繼承され來つた價格の奥にあつて働きかけてゐる一法則、即ち價值先行の法則の存在を否定しながら、他方に於て、之に代る可き一法

則即ち稀少性原理の作用を明に認識し、この基礎に立つて彼の價格理論を築き上げるのである。單にそは一價格論の基礎的理論たるのみならず、彼の全經濟學の背後に横たへられたる根幹的法則である。

故に、この點に於て彼の經濟學は、その理論的構成の援を價值に求めずして、稀少性に求めたのである。價值(Value, Wert)は稀少性(Scarcity, Knappheit)に書き換へられたのである。即ち、經濟生活に於ける價值支配を認識せずして、稀少支配を認識したのである。そして、第一義的に價值を、經濟學の理論追求の端緒とせずして、稀少性をその嚮導的概念としたのである。經濟學に於て、その學的基礎を何處に求む可きや理論的根據さへ確立し得るならば、その概念の選擇は自由であると云はなければならぬ。故に、彼が價值學派を一蹴し去る際に用ひた①「正統學派は價值と云ふ概念を勝手に導き出すことによりて、經濟學を誤れる軌道に乗入らしめた」と云ふ言葉は、必ずしも正しくはない。要は理論構成の立場にある。又②「經濟學に於て、價值は抜きすてる可き過去の底荷である、我々がかゝる底荷全部を永久に引きつづつて、行く可き何等の理由も存せず」と云へる言葉も彼に於てのみ、正しき言葉である。

價值論を打立て、それより經濟學を研究するのにも稀少性原理を打立て、それより經濟學を始めるも要するに、便宜の問題である。前者は、經濟生活に於ける價值支配を認識し、後者は稀少性支配を認識したのである。それより價格論に行く行程は、互に夫々一々の理由を有つのである。只③ I. Adler の言に於ける如く「全般的に價值論を放棄しようとするか、又は、資

本主義的經濟生活總過程の理論的構成へ精進しようとするか、するものにとつては、稀少性原理は確かに有用なる出發點たり得る」との批評は公平なる見方と云ひ得る。

次に、本論に關係深き部分にしつ「Fundamental Theories in Economics」に表れたる④「貨幣制度なき原始社會が近代社會に先行したと言ふことは誤りである」と云ふ點及び⑤「人類の生活史に於ては、貨幣なき財貨交換に正常的に依存する社會は存しなかつたと云ふことは間違ひない所である」と云ふ前提は、要するに、貨幣單位を導き入れたる、價格論が經濟學に於て正しいのであつて、貨幣をぬきにした價值論は、不必要であると云ふことを、貨幣史に於ける史實を以つて證明せんとしたものである。

この前提に對しては、不幸筆者は史實を確めたる證據力を有たぬため反駁を、加へ兼ねる次第であるが、價值不必要論に對する理論的根據としては、人類の生活史に於ける貨幣なき社會の有無は、本質に必要不可欠の重大問題ではない。寧ろ本質的に重要なものは前に展開した所の經濟學の究域に於ける實相透視の問題中に横たはつてゐる。故に G. Cassel に於ては價值不必要論の擊破用具の一切は、稀少性の理論構成の中へ投げ込まれてゐる。

この重要な鍵を握る稀少性原理は、經濟生活に於て貫き流れてゐる、生活手段の稀少性支配を認識して經濟學の基礎的原理と銘打つて、賣り出されたものであるが、それは「David Ricardo に於て揚棄され W. Lewis に於て訂正されて、已に經濟學上に於ては陳腐なる自明の理である」とは雖、今等の學者に従ふ可き

# 學 內 報

## 學部及大學豫科入學式

大學各學部、大學豫科入學式は四月十四日午前十時より千里山學舎威德館講堂に於いて舉行、國歌合唱の後先づ仁保學長は勅語を捧讀し、次いで學長の式辭あり、終つて學部入學生總代、大學豫科入學生總代の宣誓があつて十一時三十分式を閉ぢた。

因に宣誓文は左の通りである。

### 學部新入學生宣誓文

宣 誓

關西大學部ニ進ムニ當リ覺意遵守ノ念ヲ新ニ益研鑽修養ニ努メ以テ本學ノ期待ニ副ハンコトヲ誓フ  
依テ爰ニ姓名ヲ自署ス

昭和七年四月十四日

關西大學學部第一學年

### 大學豫科新入學生宣誓文

宣 誓

關西大學大學豫科ニ入ルニ當リ謹テ本學建學ノ趣旨ヲ體シ以テ學生ノ本分ヲ全ウセンコトヲ誓フ 依テ爰ニ姓名ヲ自署ス

昭和七年四月十四日

關西大學大學豫科第一學年

## 專門部入學式

專門部第一部及び第二部入學式は四月十四日午後二時より天六學舎講堂にて舉行された。國歌合唱の後仁保學長は勅語を捧讀し、それより學長の式辭あり、更に武田專門部主事は新入學生に訓辭を與へ、最後に各部新入學生總代の宣誓があつて、三時三十分閉式した。宣誓文は次の通りである。

宣 誓

關西大學專門部ニ入ルニ當リ謹テ本學教養ノ趣旨ヲ體シ以テ學生ノ本分ヲ全ウセンコトヲ誓フ 仍テ爰ニ姓名ヲ自署ス

昭和七年四月十四日

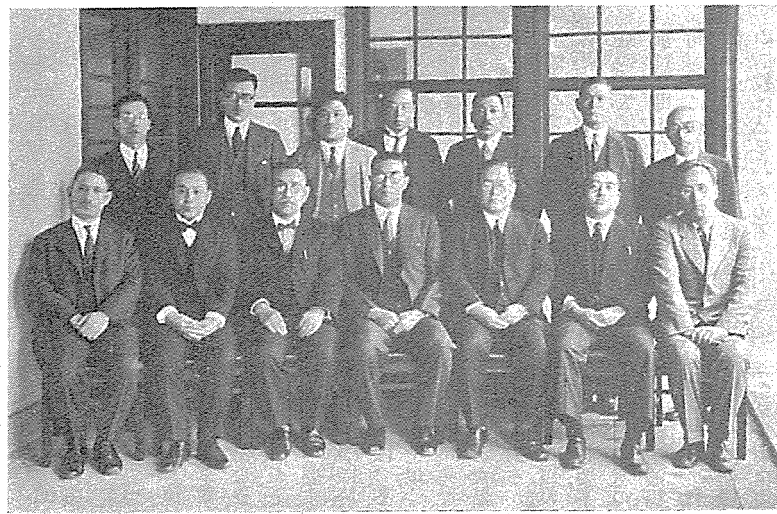
關西大學專門部第一部入學者總代

關西大學專門部第二部入學者總代

### 關西私立大學聯合

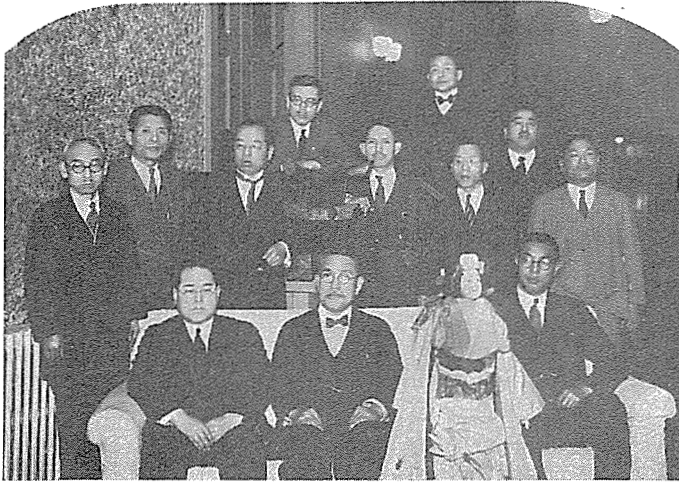
#### 第四回學生監學生主事會

四月二十三日午前十時より本學千里山學舎クラブ・ハウスに於いて、第四回關西私立大學聯合學生監學生主事會議が同志社大學、龍谷大學、大谷大學、立命館大學、高野山大學、關西學院大學並に本學の七大學全部出席の上開催せられた。當日は文部省より學生課長久慈學氏臨席、午前中は久慈學生課長より最近學生思想問題の近狀につき詳細なる報告あり、午餐に入り、仁



(てにヌウハブラク舎學山里千學本) 會事主生學監學生學回四第

保學長は一場の挨拶をなし、午後引續き會議は續行せられ、各自學生思想問題につき質問應答各自意見の交換あり、更に龍谷大學よりは「豫科及び專門部生徒の操行點を平均點中に加ふるの件」につき議題が提供せられたが、各自意見が續出してこの問題は宿題として



文樂座に於ける學生監事會の一の行

留保せられ、次回のこの會議に各自具體的の意見を持寄ることになった。その他種々有益なる各大學隔意なき意見交換がせられたが、盡くべくもなかつたので午後四時過ぎ會議を閉じた。次の當番幹事は大谷大學である。

それより一行を文樂座に案内し、歡を盡くして午後十一時頃散會した。當日の出席者は

- 久慈學氏(文部省學生課長) 藤田義彦氏(同志社大學學生監) 絹笠佐一氏(同志社大學學生監) 緋川規城氏(龍谷大學學生監) 益永善行氏(龍谷大學學生課司事) 青山 綱綱氏(大谷大學學生監) 磯崎辰五郎氏(立命館大學主事) 正影光龍氏(高野山大學主事)
- 本學よりの出席者は仁保學長、矢島學生監、村上大學豫科主事、武田專門部主事、可野專門部生徒監、田川庶務課主任、木戸教務課主任。

### 德島縣下學校配屬將校一行の 本學專門部學校教練見學

四月二十六日德島縣下の專門學校並に中等學校十四校の配屬將校連は德島縣學務部長と共に本學專門部第一部の教練見學のため來學された。右は大阪第四師團司令部より、特に本學專門部第一教練見學の指令により本學專門部が榮譽ある選に當つたわけである。一行は正午過ぎ本學千里山學舎クラブ・ハウスに於いて午餐を共にし、其の席上に於て本學配屬將校小松中佐は本學の學校教練について詳細なる説明をなし、武田主事は一行に對し挨拶を述べた。それよりグラウンドに於いて小松中佐指揮の下に、約一時間に亘り學生の小隊教練を實施し非常なる好評を博した。當日の見學せられし配屬將校の學校名は左記の通りである。

- 德島高等工業、德島師範、德島中學、脇町中學、富岡中學、撫養中學、池田中學、阿波中學、麻植中學、海部中學、德島工業、德島商業、德島農業、板西農蠶以上諸學校。

### 追(再)試験施行

大學 豫科 自五月九日  
至五月十三日  
專門部第一部 自四月二十日  
專門部第二部 至四月二十五日

尙學部は來る二十七日より六月三日まで施行の豫定である。

### 動 靜

岩崎卯一教授の學外講演——奈良歩兵第三十八聯隊所屬陸軍將校團より『國家社會主義』に關する講演の依頼を受け、三月二十二日午後二時より五時まで同聯隊本部將校集會所に於て講演を試み、且つ午後六時より歓迎宴に臨み隔意なき意見の交換を行つた。

板野友造氏(協議員) 四月十日開催の政友會大阪支部役員總會に於て政友會大阪支部長に擧げらる。

水谷揆一氏(教授) 府下豐能郡中豐島村會根の舊宅に移轉(電話岡町五二五番)

大橋光雄氏(講師) 天王寺區眞法院町六〇に轉居

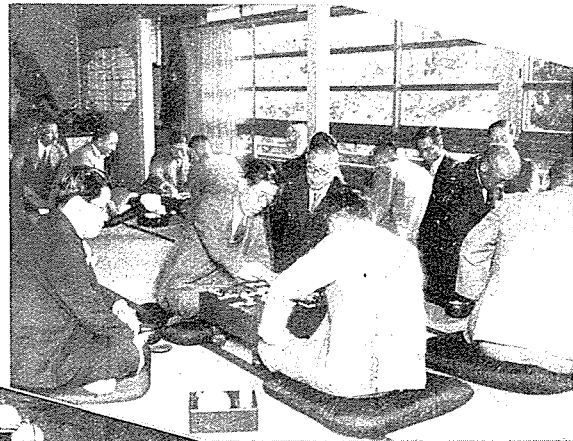
高木益郎氏(舊講師) 四月十七日逝去。

# 校友彙報

## 大阪支部春季懇親會

大阪支部では五月八日をトシ、本年度春季懇親會を開催した。當日はあいにくの雨天であつたがもとより晴雨に拘らず決行することは豫てよりの定め、午前八時半頃から續々梅田阪急に集つた會員は順次阪急にて六甲に向ふ。花村柳堤一抹の淡烟に姿を没したるまた一興、車中乗客に老婆あり、會員より六甲登山と聞きて驚きの眼を見張りたる様も痛快であつた。六甲に下車したる一行は、更に登山自動車にてロープウェイ乗場に至り、これよりロープウェイによつて山頂を極めんとす。雨は攪む氣色もなくロープウェイより見わたせば秀峰峻嶺模糊として煙霧の間に隱見し、一溪を越へて迎ふる層峰、またも迎ふる千仞の溪谷、雨あるが故に趣は更に趣を加へ、言語に絶する雄壯思はず歎辭を發せずには居られない。かくて山頂阪急食堂に到着、先着後來の會員一同集りて俄かごしらへの握り飯に喜びつゝ、一憩の後、再び自動車の便をかりて有馬に出で、懇親會場に當てられたる「兵衛」に集合す。開宴までの時を利用して温泉に快を新にし、湯上りの氣分に或は雨に色増す窓外の新緑を賞づるもの、或は湯の香漂ふ新緑の便りを一葉の繪葉書に托するもの、或

は碁を圍むに餘念なきもの、色とりどりの風景を展開しつゝ、開宴を待つかくて午後四時、宴會のみ出席せんとする會員を加へて先づ記念の撮影をなし、四時三十分開會、砂川支部長より先年度の會計報告、その他大學の近狀についての報告あり、更に支部長は新任理事玉木三郎氏を一同に紹介され次に今日の雨は俗化せる有馬を美化し、數十年前の面影を再現せしめたるものといふべく、この意味に於いて今日の雨は寧ろ天惠なりと、人ならぬ仕業に感謝されたるも面白し、宴に移るや折から待る湯の町の美女に會員の氣勢いよいよ舉り、歎盡くところを知らず、極めて



大阪支部春季懇親會

(右) 開宴を待ちつゝ

(下) 懇親會出席の會員

↑(有馬温泉兵衛にて)





盛會の裡に閉宴したのは七時過ぎであつた。

因に當日の出席者は左記の通りである。

一海景宥、今田光匡、岩崎卯一、飯島善之助、飯田正一  
飯田清藏、原田鹿太郎、西村勝太郎、本田武藏、榎木浩  
巖、大崎萬太郎、笠西大次郎、大山彦一、尾崎信夫、和  
田相也、神宅賀壽恵、河村信一、桂忠雄、河村宜介、金  
井正夫、可野敬四郎、神屋敷民藏、四辻詮、吉田晋松、  
玉木三郎、武田藏之助、垂水善太郎、田川七郎、竹正宗  
助、永田良雄、内藤正剛、中谷敬壽、長瀬彌壽治、室石  
常秀、村松岩吉、歌橋千秋、野島藤次郎、野口政次郎、  
野崎勇二郎、野村次夫、黒田莊次郎、山根福藏、山崎敬  
義、山本彌一郎、矢口孝次郎、安川安太郎、山本順應、山  
野藏、松本櫻四郎、前田常好、小泉幸治、小松安太郎、  
近藤友房、遠藤鏡、菊地宗三郎、喜多村桂一郎、木戸卯  
之助、清成五六郎、岸田駒太郎、道端常治郎、三島律夫  
宮田平三、篠田栗夫、新町徳之、神保敏男、城内順、引  
野秀春、砂川雄俊、角田好太郎(イロハ順)

### 福岡支部春季例会

會員判事藤田彌太郎氏の送別を兼ね、四月十八日福  
岡市西公園荒津亭に於て春季例会を開く。時恰も櫻花  
爛漫の好時節に加ふるに、眺望絶佳なる場所に於て午  
後五時開會、池田支部長の挨拶あり。七時開宴燒芋時  
代の舊談に時の移るのを知らず、孰れも歡を盡し池田  
辯護士の音頭にて母校の萬歳を三唱し、和氣靈々裡に  
散會したるは同夜十時過ぎであつた。

### 大四會春季總會

關西大學を大正四年に卒業した同窓生の組織せる

「大四會」は今回會員中神宅賀壽恵君(辯護士、關大講師)  
が大阪辯護士會の副會長に就任し、又塚本萬次郎君が  
大阪市東區役所庶務課長に榮轉されたのを祝賀する  
ため四月二十三日午後六時から、阪堺沿線松虫花壇で  
春季總會を開催した。母校を去つて既に十七ヶ年、同  
窓生悉く不惑の齡を上下し、社交皆圓轉自在、歡をつ  
くして午後十一時散會した。出席者左の如し(イロハ順)



(てに壇花虫松) 會總季春會大四

### 千里山會發會

岩崎卯一(關大教授。法覺稔(實業家)。神宅賀壽恵(前  
掲)。筒井春尾(印刷所品榮堂支配人)。塚本萬次郎(前掲)  
中井彌六(辯護士)。中澤源次郎(實業家)。宇佐美正祐  
(辯護士)。芦傳一(實業家。笹尾中庸(醫師)。三好萬次  
(大軌總務部次長。自井誠(辯護士)。以上 一岩崎氏輩

關西大學出身にして大阪府に奉職するもの、其の數  
甚だ多きにもかゝはらず、母校を紐帶としての會の組  
織を持たなかつた事を遺憾とし有志相謀り、母校と密  
接なる關係を保持しつゝ、會員の親睦を圖る目的を以  
て千里山會なる名の下に、第一回會合を去る四月二十  
三日午後一時より上六出雲屋別館に於て開催した。

集るもの學校側より内藤理事、木戸教務主任、會員  
は西崎(社會)織田(保安)小野田(天王寺)大泉  
(住吉)川西(船場)谷原(中本)中辻(會計)中島(戎)  
武良(朝日橋)宇津原(市岡)前田(大津)小島(總務)  
天宅(調停)佐野(議事)の諸君にて

内藤代議士の時局所感、佐野府屬の滿蒙視察談等あ  
り、會長を内藤理事に、武田専門部主事、木戸、松崎  
兩主任を賛助員に推し、春秋二季總會を開催すること  
として和氣靈々たる氣分旺盛の裡に閉宴した。  
なほ大阪府在職の校友諸君の會を希望す。

## 三二一會創立

一九三二年度専門部經濟學科卒業の有志は、我が三二會の發會式を去る四月十五日午後六時より、東區北久太郎町大阪三品ビル五階まさご食堂に於て舉行した。まづ小林君「折角多數の御參會を願ふやう同窓生一同に御通知申上げましたが、勤務の都合もあつてのことせうが、出席者は豫期して居たより少數でありました。如何に小さくともこの會は我々が生みの親であり、我々の育ての子として相互の努力によつてガツチリとした會をつくり上げよう」と挨拶し、中尾君を座長に推薦、中尾君は「今夜集まれた方は勤めて居られる方が多い様ですが、吾々はお互に助け合つて會員の身邊のいろ／＼の事件もこの會はもち出して、吾々の力で解決して行く様にしよう」と述べ、相互扶助を目的とし、會名を三二會と兩場一致の下に命名、中尾君を常任委員、小林、森兩君を幹事とし、食事をとりながら懇談、次回は五月中旬開催すること、して盛會裡に散會した、時は十時であつた。

出席者——如中孝雄、西田忠夫、土井正登、川上孫次、角中義雄、高知友次郎、牛尾右三、小林捨男、遠藤吉次、人見八一郎、森内純吉、森義正、西田君報

神戸市役所關大俱樂部

春季總會

神戸市役所關大俱樂部にては、四月二十六日午後六時より湊川かき姫に於て、創立一週年を記念する春季總會を開催した。集ふもの主客二十二名。來賓として五十川、奥田兩先輩並に母校より、武田、木戸兩先生を迎へた。

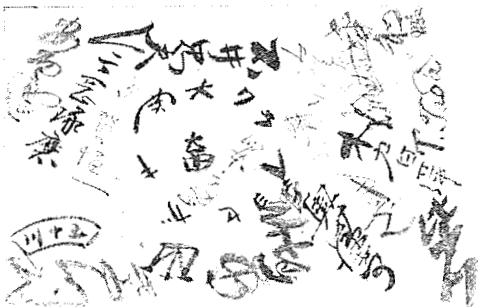
劈頭安西君の開會の挨拶あり。藤野君より經過報告今岡君より會計報告をなし、會則一部變更の件滿場異議なく承認して、役員改選に入り岡野、小西正副會長留任に決し幹事十一名左の通り新任せらる。

會長挨拶に次で武田先生起つて、母校の近況を詳さに報告せられ。更に五十川、木戸、奥田諸先生も夫々激勵的な祝辭を述べられ、會長の謝辭を以て會を閉ぢて宴に移る。

終始なごやかなる氣分の中に、百パーセント關大デを味はひ、隨所に猛者振りの發揮よろしく、餘興は盡きるを知らぬ有様、斯くて盛會裡に十時散會した。

因に當日出席者左の如し

武田藏之助先生  
木戸卯之助先生  
五十川直市先生  
奥田源治郎先生  
岡野重三郎、  
小西健左衛門、



神戸市役所關大俱樂部總會席の上の書

仁禮 景賢	友成 政夫	大西 克己
藤野 剛三	今岡 琢磨	多賀 恒一
岸本 恒夫	石井 忠夫	松尾 一雄
山本 寛二	安西 信正	河原 政次
皆川 武	多田 隆久	平野 浩
谷 正司		

幹事 大西 克己(港灣課) 岸本 恒夫(社會課)  
山本興喜三(水道課) 出口 清一(財務課)  
山本 寛二(灘區役所) 皆川 武(神戸區役所)  
平野 浩(葦合區役所) 谷 正可(湊區役所)  
赤尾 保(湊西區役所) 森 且盛(林田區役所)  
生魚茂里男(電氣局) —(幹事報)—

動 靜

竹内虎治郎氏 (明三九專法) 廣島縣三次區裁判所檢事

より愛媛縣西條區裁判所檢事に轉任。

宗岡光龜氏 (明三九專法) 松山區裁判所監督判事より吳裁判所監督判事に轉任。

霜村盛郷氏 (大二三專商) 今春九州帝國大學法文學部英文學專攻を出でて歸阪す、新住所港區八幡屋錦町一八〇。

竹谷謙貴氏 (大二四專法) 任警部補、島之内警察署に勤務。

五十川直市氏 (大一一專法) 辯護士事務所を神戸市磯上通八丁目九(高尾ビル三階)に移轉、電話符合②一三六〇番。

伊場信一氏 (昭三專商) 警視廳警部補、京橋警察署に轉勤。

西川英三氏 (昭三專商) 今春神戸商業大學卒業直に三菱商事會社に入社(東京市丸ノ内二丁目)本店肥料部に勤務。

納庄清之進氏 (昭四專法) 北海道廳高等警察課より小樽水上警察署に轉勤。

秋山雪太氏 (昭四專商) 朝鮮總督府地方課より全羅北道産業課に轉勤。

互本眞市氏 (昭四專法) 東淀川區本庄中通三丁目二に於て備後屋履物店の經營に當る。

金丸義郎氏 (昭五大法) 宮内省帝室林野局札幌支局に勤務、住所は札幌市南七條西五丁目、大野方。

西條傳吉氏 (昭五專文) 北海タイムス大阪支局在勤同支局は今般中之島朝日ビルに移轉、氏の住所は西淀川區百島町。

奥川武郎氏 (昭六大經) 帝國生命保險會社大阪支店に入社。

伏田秀雄氏 (昭六專經) 大阪瓦斯會社に入社營業部に勤務、住所は北區會根崎中一丁目六一。

西田一行氏 (昭七大經) 札幌鐵道局雇員採用試験に合格、小樽驛貨物係勤務。

保田素二郎氏 (昭七專經) 文化學院文學部專攻科に入學、東京府下千駄ヶ谷四三四、足立義包方。

末松 正行 (推) 鳥取市栗谷町七丁目、官舎

林 秀一 (明三六法) 西區本田町通一丁目五一

井上 篤之 (明四三專商) 堺市大濱南町公園五五

香取 一 (大四專法) 東區内本町橋詰町二八

丹 品 (大五專法) 今治市神之木通一七九

下許 保正 (大七專法) 倉敷市旭町東通り

丹 二良 (大一一專法) 堺市備屋町大道六

八田 薫 (大二三大經) 福岡市赤坂門英數學館寄宿舎監室

村井 久 (大二四專法) 埼玉縣浦和町外前地三七三

前川信之助 (大二四專法) 尼崎市難波南通七丁目四六

島屋 清教 (大二四專法) 福井市清川下町一九

杉山 志敏 (大二四專經) 京城府櫻井町二丁目一八

香西 政一 (大二五專商) 名古屋市東區田代町字坂上一〇一

山田國三郎 (昭二專商) 東區北久寶寺町二丁目、村西商店内

森井 一巳 (昭三專法) 三島郡吹田町濱田二七七〇

足立 京二 (昭四專經) 港區音羽町二丁目二〇

馬場 巖 (昭四專商) 神戸市灘區神田二三

國乘 雄三 (昭四專商) 北區澤上江町九丁目四五

杉本 利雄 (昭四專商) 東區區猪飼野町中一丁目三

谷口 賢治 (昭六專法) 西宮市外仁川、關西學院神學部成全寮内

中川 兼治 (昭七專法) 東淀川區北川日町五六三、福原榮三郎方

保田 龍兒 (昭七專經) 西淀川區大仁本町二丁目〇

小島公一郎 (昭七專商) 神戸市上筒井、神戸商業大學寄宿舎

深川 浩 (昭七專商) 西成區千本通四丁目六、淺野方

住 所 移 動

改 姓

(舊) (新)

村井 久 (大二四專法) 埼玉縣浦和町外前地三七三 昭七專商 中野達夫 中野達男

# 本學年度學科擔任表

## 大學學部

社會學、社會政策、哲學 演習、社會學特殊問題研究 外國政治學研究 殖民政策、工業政策	漢文學	拉丁語、希臘語、言語學	保險學、保險政策	商行為	法理學	債權總論	英文學、文學概論	英文學	英法、信託法、民法總則 債權各論	英文學	佛語	佛文學	哲學演習、外國政治學研究、 心理學、獨逸語、 政治學、獨逸語、 商業英語、商品學、商業 實務	破產法	佛語	交通政策、交通論	哲學史特殊問題研究、宗 教學特殊問題研究、西洋 思想史、心理學、宗教學 商業經營學	保險學、保險政策、損害 保險論	國際公法(戰時)	セミナリ(勞働法)、政 治學史、外國政治學研究 論理特殊問題研究、論理 學、哲學概論										
岩崎卯一	磯部喜一	石濱純太郎	泉井久之助	今泉浩	原田鹿太郎	仁保龜松	西村信雄	堀正人	細江逸記	本莊鐵次郎	所尾俊彦	大坪一	大山彦一	賀屋俊雄	金井正雄	賀來俊一	河村宜介	片山正直	加藤金次郎	川元英二	河原政勝	吉田一枝	武内省三							
銀行論、簿記	統計論	英語經濟、特殊經濟問題 研究、經濟學、セミナリ (經濟學)	海商法	商業史、英語、演習	西洋倫理學	社會學	東洋倫理學	英文學	哲學特殊問題研究	損害保險	美學、美學史	行政法總論、同各論、獨法	經濟地理	英文學	英文學	商法總論、會社法	獨逸語、食取論、關稅論、 獨逸語、文明史	強制執行、判決手續	佛語	取引所論、市場論	法制史	セミナリ(金融)、貨幣 論、金融論、外國為替	印度哲學佛教學	經濟學史、演習、セミナ リ(經濟)	英法	農業政策				
竹田省	瀧澤喜子雄	財部靜治	武田鼎一	武田藏之助	田邊信太郎	龍野健次郎	高田保馬	高瀨武次郎	瀧川規一	高山岩男	瀧谷善一	辻部政太郎	中谷敬壽	中村良之助	村上喜貞	內多精一	鳥賀陽然良	野村次夫	矢口孝次郎	山田正三	柳瀬兼助	增山忠次	牧健二	正井敬次	前田聽瑞	古川武	安藤光	赤羽豐治郎		
行政法各論	民事訴訟法	國際私法	經濟政策、國際經濟論	商業數學	親族法、相続法、佛法 商業英語	刑法總論、刑法各論、刑 事訴訟法	教授法、教育學	東洋哲學特殊問題研究、 國文學、東洋哲學思想史 (日本、支那)	英語學	外國政治學研究、外國經 濟學研究	憲法	セミナリ(財政)、財政 學、地方自治、英語經濟 學、外國政治學研究、外交史 政治學	簿記、會計學	獨逸語、哲學演習、西洋 美術史、認識論、哲學講義	國際公法(平時)	物權	教	教	教	教	教	國語	英語	英語	佛語	英語、法制	佛語	佛語	經濟、英語	自然科學、數學
佐々木惣一	齋藤常三郎	齋藤武生	作田莊一	木村禎橋	木村健助	水谷揆一	宮本英倫	三枝樹正道	新町德之	グレン・ショー	平井淳一郎	森口繁次	森下政一	清家唯一	須藤文吉	菅守常	末廣重雄	末川博	山内六郎	飯田正一	堀正人	所勇一	大坪一	和田豐二	賀屋俊雄	賀來俊一	河村信一	河村信一	河村信一	
佛語、英語	哲學	漢文	心理、倫理、獨語	地理	獨語	英語	英語	漢文	歷史	英語	獨語	英語	國語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	國語	英語	英語	佛語	英語	佛語	佛語	佛語	政治學	
加藤金次郎	武内省三	高橋盛孝	中村鄧次郎	中村良之助	向軍治	村上喜貞	矢口孝次郎	藤澤章次郎	小泉幸治	安藤光	溝江亮一	水谷揆一	三枝樹正道	新町德之	平井淳一郎	横山鎮明	大原嘉三	吉村秀次	竹腰吉次	岩崎卯一	磯部喜一	磯部喜一	西村信雄	西村嘉三郎	西村勝太郎	本莊鐵次郎	堀正人	德尾俊彦	大山彦一	

### 大學豫科

### 専門部第一部

商行為	大橋光雄	物權	柚木馨	法學通論	和田豐二	英語、英文法	山田松太郎
法學通論、民法總則	和田豐二	英語	水谷揆一	商學	河村信一	國語	山脇毅
商品學	河村信一	刑法總論、刑事訴訟法	宮本英俯	商業英語	賀屋俊雄	英語、英文學史	安田恭平
商業英語、佛語	賀屋俊雄	財政學	森下政一	倫理學	片山正直	各國為替、外國貿易	正井敬次
商業簿記	加藤金次郎	銀行及金融論	森川太郎	海上保險、經濟原論	河村宜介	漢文、修辭學	藤澤章次郎
海上保險	河村宜介	國際公法	清家唯一	佛語、商業簿記	加藤金次郎	英語、經濟學史、經濟原論	古川武
憲法	吉田一枝	銀行簿記、工業簿記、原價計算	須藤文吉	舍社法	金井正夫	英語會話	フインチャイ
哲學概論	武內省三	體操	小松安太郎	國際公法	河原政勝	國史、西洋史	小泉幸治
經濟原論	武田鼎一	物權	可野敬四郎	商法	神宅賀壽	國語學、言語學	小中正晴
商業通論、商業歷史、商業政策	瀧澤喜子雄	憲法、法制史	菊地宗三郎	物權	神戶三郎	國語、有職故實	江馬務
保險法	武田藏之助	哲學		經濟原論	吉田一枝	海商法	安藤光
行政法總論、行政法各論	瀧谷善一	經濟政策、社會政策	岩崎卯一	保險法	武內省三	獨語	赤羽豐治郎
地理、交通論	中谷敬壽	經濟政策一般、農業政策、植民政策、工業政策	磯部喜一	商業通論、商業政策、商業歷史	武田鼎一	破產法、民法總則	齋藤常三郎
商業英語、海外經濟事情	中村真之助	實踐倫理、國民道德、東洋史、倫理學	入江真太郎	手形法	武田藏之助	債權契約、事務管理	坂本憲三
英語	中川庸太郎	支那文學史、支那哲學史	一海景宥	論理學	瀧澤喜子雄	國際私法	木村健助
舍社法	村上喜貞	論理學	石濱純太郎	英語	田中保太郎	取引所論	木村禎橋
經濟史	鳥賀陽然真	國語、國文法	井上隆證	日本漢學史、支那學、漢文	田邊清市	教育學、教授法	貴志喜四郎
商法總則、倉庫、稅關	宇治伊之助	商行為	飯田正一	英語	瀧谷善一	統計學	菊田太郎
經濟史	野村次夫	債權總論、獨語	原田鹿太郎	英語	高橋盛孝	刑法總論	三枝樹正道
民事訴訟法	山田正三	心理學	西村信雄	論理學	坪内士行	民事訴訟法	宮本英俯
論理學	柳延胤	商業英語	西村嘉三郎	行政總論、行政地理	辻部政太郎	國語、國文學史	箕田正一
外國貿易、外國為替	正井敬次	刑事訴訟法	西村勝太郎	經濟地理、商業地理、交通論	中村鄧次郎	漢文	新町德之
取引所論	增山忠次	佛語	所富田仲次郎	海外經濟事情	中谷敬壽	國語、國語學史	篠田栗夫
經濟原論、經濟學史	古川武	債權	豐岡佐一郎	並山興道	中川庸太郎	英語	平林治德
倫理學	高山岩男	佛語	德尾俊彦	村上喜貞	並山興道	銀行及金融論、英語	平井淳一郎
商法、手形法、海商法	安藤光	漢文	茶谷勇吉	向軍治	村上喜貞	民事訴訟法總則	森下政一
獨語	赤羽豐治郎	政治學	茶谷忠治	內多精一	上田操	英語	關豐馬
破產法	齋藤常三郎	文學概論	大山彦一	商事訴訟法	野村次夫	獨語	鈴木富太郎
刑法各論	佐伯千仞	英語、英作文	小川忠藏	經濟史	矢口孝次郎	英語史、發音學	菅守常
親族法、相続法、國際私法	木村健助	民法總則、親族法、相続法	和田子一	刑法各論	山田卯三郎	銀行簿記、工業簿記、原價計算	杉平顯智
商業數學	木村禎橋						須藤文吉
統計學	菊田太郎						

# 學生彙報

## 野球部

四月一日より施行せられたる文部省訓令野球統制規則に準據し、新に關西六大學野球聯盟(加入校——京都帝大、同志社大學、立命館大學、關西大學、神戸商大、關西學院大學)組織せられ、文部省の許可を得たり。該聯盟新役員中理事として岩崎卯一野球部長、幹事として本學學部出身にして前關大野球部マネージャーたりし田中義一君(現に關大野球俱樂部幹事長)の二名が關大側を代表することなれり。

## 射撃部(千里山)

衛戍射撃大會に西本君優勝す

四月三日新裝成れる城南射撃場に於て開催せられた第四師團衛戍射撃大會に本學チーム出場し、強豪大阪外語、甲南高校、神戸商大を初め超中學級の明星、東商を斷然壓へ、本學優勝せり。

メンバー及び戦績左の如し。

- 優勝 四五点 學部三年 西本營兒
- 二等 四三点 專門部商三 稻光安平
- 三等 四二点 學部三年 一ノ瀬義次
- 四二点 專門部商三 中村正藏

尙一般の部に於て關大俱樂部又二等より三等迄入賞せり。

- 一等 四二点 關 俱 淺川文夫
- 二等 四〇点 關 俱 加藤初男
- 三等 三八点 關 俱 久保三郎

以上の成績を以て本學堂々射撃界の王位を占む。

優勝者西本君は寺内第四師團長より賞狀、一等賞、優賞カップ並に特別賞を授與せらる。

## 山岳部(專門部第一部)

乘鞍岳登山——芝田清、黒田隆一、末吉俊一、藤戸保彦、杉江孝太郎、齋藤壽美恵

三月廿二日(曇) 後六、四五、大阪驛發

廿三日 A.M. 六・〇五杉本着、鳥々同七・五〇、前

川渡九・〇〇、番所ヶ原一〇・四〇、鈴蘭小屋正午



(部岳山) 屋小の肩岳ヶ乗

廿四日(雪後晴)

- 鈴蘭小屋發 A.M. 九・一五、冷泉小屋着 P.M. 〇・一〇、冷泉發二・二〇、富士見着三・三〇、冷泉着四・〇〇
- 廿五日(晴)
- 冷泉發 A.M. 八・三〇、肩ノ小屋一・〇〇、頂上一・四五、冷泉着、一四〇・鈴蘭小屋着四・三〇
- 廿六日(晴)
- 鈴蘭發 A.M. 八・三〇、大止峠九・五〇、小梨峠一・〇〇、白骨温泉 P.M. 一・三五、澤人渡四・五〇

——杉江君報

## 射撃部(專門部第一部)

合宿練習——三月廿二日早朝部員一同銃器庫前に集合菊池先生引率の下に高樓射場に向ふ。午前十一時着、憩ふ間もなく構架をなし、渡邊マネージャーの發聲で射撃を開始す。的は未だ一回も使用せしことなき圍頭的にして昨秋以來久万振りの實包射撃だ。されど日頃の鍛練は渡邊君單發發射にて三五點を獲得、續く四〇點を得、斯くして八人總點二二八點を以て第一回終了す。時に午後一時七分。

午後二時三〇分より四時二〇分迄二回射撃を爲して意義深き第一日を終り、五時過ぐる頃夕陽を浴び乍ら宿泊所菊亭にいたる。

當夜は高槻工兵隊の夜間演習あり、菊池先生より關

夜の演習に就ての講話を傾聴し十一時十五分寝につく

三月廿三日、六時起床、十時半射撃開始す。間もなく小松、可野兩先生を射場に迎え激動さる。第一回を終り、第二回は来るべき大阪城南射場の衛戍射撃を考慮し、距離を三〇〇米に延長す。練習以來初めてのこととて好成绩と云ふを得ず。午後二時第三回を始める直後部員馬場君風邪を推して参加す。

第四回の最終回は紅白對抗試合を爲す。各組四人にて紅組一二五點、白組一一三點、紅組の勝に歸す。時に四時十五分。

僅か二日の合宿なりしも部員の熱心と勇氣により七回の猛練習に各自短を補ひ長を助けて平均(八名)六・五の好成绩を得、休暇中を有益に過した。

参加者——木田篤孝、渡邊友年、笹部役次郎、細川生男、中村正藏、大江五十雄、稻光安平(以上商三)、嘉納保雄(商二)

特別参加——菊池先生、小松先生、可野先生、馬場盛一(商三)

衛戍射撃——東洋一と云はれる日頃のモダン射場と改築された大阪城南射場が去る四月二日射場開きをされたその翌日衛戍射撃會が同射場に於て開催され、我部も五名の選手を出場せしめた。

好晴に恵まれた會場は汚れを帯びぬ壁に反射する春陽に汗ばむ位だ。渡邊君を除きトンネル式の射場は無經驗なりしに稻光君は二等、中村君は三等に入賞大い

に校名を挙げ得たことをお傳へしたい。

尙當日客員として本専専門部教官小松、菊池兩先生來場せられた。

結	31	二等賞
成部	20	川光
細川	43	稻邊
○稻邊	38	中村
○中村	41	計
計	183	平均
平均	36.6	

——嘉納君報——

### 新更雜誌部 (専門部第一部)

吾が天六學友會生れてより早二ケ年は經過し其の間名のみ存在してその實質的に機能を發揮し得なかつた雜誌部は、學友諸君の熱心なる希望により茲に濼測たる意氣を以て更生した。活動の原動力たる部費の少いことは遺憾であるが、これを最も効果的に活用して重大責任を遂行し新更の使命を果さんとするものである。生れて日尙淺き雜誌部の發展如何は學友諸兄の後援と助成に俟つものである。

因みに原稿の種類は法律、經濟、商業、社會等に關する論文を主體とし時事批判、其他隨筆、小品文等を歓迎す。熱ある諸兄の研究の結果を發表する機關として吾雜誌部の利用を乞ふ。投稿規則は追つて發表す。

——杉谷君報——

### 辯論部

春季東海地方大遊說決行——二十數年の歴史と學生辯

論界の覇權とを繼承した我辯論部は、先輩の尊き努力にむくい且は學生辯論の威を振ふべく東海の地、名古屋方面に春季大遊說を敢行した。時正に燎亂の春四月我等の先輩同校友會東海支部並に名古屋新聞社の後援を得七拾餘萬の讀者をもつ名古屋新聞數日來の大々的宣傳と先發隊(渡邊部長、酒井部員)によつてなされた辻々のポスター、加ふるに隊員一行の最後のな大宣傳は名古屋市民をして先づ我等が關大辯論部の存在を



辯論部春季東海地方遊說隊校友會支隊訪問(名古屋新聞社上にて)

認識せしむ。

十日—名古屋城下に第一聲をはなつ！定刻前聴衆は續々として會場市會議事堂に集ふ。定刻七時一同の謳ふ學歌、辯論部歌によつて先づ開會に宣す。立代り壇上に獅子吼する辯士の熱誠は聴衆をして感動、熱狂せしむ尙之の大會をして意氣あらしむるべく我等が先輩名古屋新聞社營業部長梅田茂氏の對支問題に關する有益なる講演あり多大の効果を收め盛會裡に午後十一時閉會せり。

九日—一ノ宮市に第二聲を揚ぐ！名古屋市におとらざる大の宣傳の効あつて言論に理解ある聴衆は續々として會場（商工會議所）に詰めかけ定刻前既に大ホールを立錫の餘地なきまでに埋む。定刻七時辯論部歌合唱裡に開會の幕を切る、全身血と熱の如き辯士の大獅子吼は萬堂の聴衆を一段と熱狂せしめ、我が辯論部の存在を再認識せしめこれ亦名古屋市のその如く多大の効果を收め午後十一時すぎ萬歳三唱裡に大會の幕を閉す。

最後に我部の爲に多大の援助と後援を賜りし校友會東海支部梅田茂氏並に富田英雄氏名古屋新聞社一ノ宮支局長梶浦子郎氏に對し厚く感謝の意を表す。

プログラム

- 一、學徒の立場から滿蒙問題を論ず
  - 商業科 石川 永次
- 一、社會生活と文學
  - 英文科 山崎 清

一、無産階級婦人解放の一考察

經濟科 田中健治郎

一、靈魂に鞭打つて最後の一人迄も

法律科 川崎 一見

一、學窓より眺めたる議會政治の前途

商業科 岩田 勝美

一、挨拶 司會者 法律科 渡邊 明夫

一、講演（時局問題）

關西大學校友會東海支部 名古屋新聞社營業部長 梅田 茂氏

一、資本主義經濟組織の没落とフアシズムの擡頭

商業科 財津 達男

一、暗澹たる現代社會相を直視して

經濟科 山崎 福太郎

山岳部（専門部第二部）

事業報告スキ

二月廿七日（土）第一班

廿八日（日）伊吹山トレーニング

同 第二班京都愛宕山トレーニング

スケート

二月七日（日）朝日ビル樓上に於て練習

昭和七年度役員決定

- 主將 角谷 武雄（法三） 委員 吉崎 幾藏（文二）
- 委員 玉野鶴伍郎（法二） 同 中永 一郎（法三）
- 同 松村 敏治（法三） 同 白井 茂（商三）

—角谷君報—

千里山俳句會

五月四日例會開催

- 若葉吹く梢の音や夏近し 田中
- 豊かなる山一望の若葉かな 同
- 匂ひせる菜の花にこむ電車かな 金子 斌
- 菜の花や製紙工場わけて見ゆ 同
- 菜の花の世界に今日も入日かな 廣田 弘應
- 静かなる若葉の城や雨煙る 同
- 菜の花や軽く疲れて湯を出づる 飯田 正一
- しろくくと雨脚ひかる若葉かな 同
- 緑したる廟江鐘の若葉かな 新町 徳之
- 菜の花に鐘の響きや寒山寺 同

—（第二九頁より續く）—

必要もなく、自明の理であるが故に捨象すべき理由は存せぬが、經濟學の基礎的理論として、見逃し得ざる目新しき構想である。之をとるとらば、經濟生活を如何に理解すべきかを欲するものにとつては、その理解に於て便宜でありや否やの一點に墮かつてゐる。

- (1) Gustav Cassel: Fundamental Thoughts in Economics; p. 52.
- (2) Gustav Cassel: The Theory of Social Economy, Vol. 1, p. 5.
- (3) Lederer: Zirkulationsprozess als zentrales Problem der Oekonomischen Theorie.
- (4) Gustav Cassel: Fundamental Thoughts in Economics; p. 54.
- (5) Gustav Cassel: ibid.; p. 57.



ナル時ノ割引券代ハ 35 錢、20 km ナル時ノ割引券代ハ 45 錢ナリトセバ割引セザル入場料ハ何錢ナルカ。但シ乗車賃金ハ 1 km ノ乗車賃金 (5 錢以下ニシテ錢位以下端數ナシ)ニ其 km 數ヲ乘ジタルモノ、入場料ハ錢位以下端數ナク、割引率 (何割ニテ表ス) ハ電鐵モ博覽會モ同率ニシテ又乗車區域ノ多少ニヨリテモ變更セズ、且ツ端數ナシトス。

### 商業數學

- ① 年五分 (5%) ノ單利率ニテ元利合計ガ元金ノ三倍トナルタメニハ幾何ノ年月ヲ要スルカ。
- ② 原價 ¥164.30 ノ商品ヲ定價ノ二割 (20%) 引ニテ賣ルモ尙一割五分 (15%) ヲ利益セント欲セバ定價ヲ幾何トスベキカ。
- ③ 今後 3 個年間据置キ其後 15 個年間、毎半個年末ニ ¥300.00 宛返済スベキ負債ヲ即金ニテ皆済セント欲セバ幾何ヲ支拂フベキカ。但シ利率ハ年六分 (6%) ニテ半個年一期ノ複利トス。

複利年金理價表 3% 36期 21.83225250  
3% 6期 5.41719144

- ④ 神戸甲商ハ倫敦乙商ヨリ代金 £2,000--0--0 ノ商品ヲ輸入セリ。今其代金ニ對シ乙商ヲシテ一覽後 90 日拂付手形ヲ振出サシムルト、同期限ナル普通ノ手形ヲ振出サシムルト下ノ場合ニ於テ甲商ニトリテ何程ノ損益アルカ。但シ利付手形ハ満期日ニ電信爲替ニテ支拂フモノトス。
- |              |                    |
|--------------|--------------------|
| 倫敦 日本宛 90 日拂 | 1/10 $\frac{3}{4}$ |
| 神戸 倫敦宛 電信爲替  | 1/10 $\frac{1}{4}$ |
| 倫敦 神戸間 郵便日數  | 22 日               |
| 利付手形利率       | 年七分 (7%)           |
- ⑤ 甲商店ノ乙商店ニ對スル貸借勘定下ノ如シ。此ノ差引殘高ヲ一時ニ授受シテ甲乙兩者ニ損益ナキ様貸借ヲ相殺セントセバ、其支拂期日ヲ何月何日ト定ムベキカ。

### 乙商店

7/1/5 商品 1ヶ月掛 ¥200.00	7/2/19 理 金 ¥300.00
2/5 商品 3ヶ月掛 " 450.00	3/8 手形 4/10 拂 " 250.00
3/19 商品 2ヶ月掛 " 280.00	4/20 理 金 " 400.00
5/9 商品 3ヶ月掛 " 500.00	

### 作文

帝國青年の使命

## 專門部 第一部

### 英文和譯 (法律學科、經濟學科)

- ① "Where there is life," says the old proverb, "there is hope." A creature with no faith in itself will die and pass out of reckoning, leaving the world to those whose faith remains.
- ② The Moon is chiefly responsible for the tides. Notwithstanding its vast superiority in size, the Sun is so far away that its pull on the waters is much less than that of the insignificant Moon.

### 英文和譯 (商業學科)

#### Heavy gain made in export trade.

A remarkable gain was registered in our exports for the latter 10 days of the past month, the figure reaching over ¥39,046,000 although foreign trade as a whole showed an adverse balance of ¥27,470,000. The volume of imports aggregated ¥66,516,000.

## 專門部 第二部

### 英文和譯 (法律學科)

At the age of about fourteen, he persuaded his father to let him go to sea. For the next thirteen years or so, he led a hard and busy life. Besides doing his work as a seaman, and learning the art of navigation, he tried to keep up his studies, and learnt how to draw maps of the countries he visited and charts of the seas he sailed.

### 英文和譯 (經濟學科、商業學科、文學科)

- ① He had never cared for children, he had been so occupied with his own pleasures that he had never had time to care for them. He had been so selfish himself that he had missed the pleasure of seeing unselfishness in others, and he had not known how tender and faithful and affectionate a kind-hearted little child can be.
- ② Abraham Lincoln was only nine years old when his mother died. The log cabin where the Lincolns lived was far from any neighbours. No minister could be present at the funeral. This made the lonely little fellow feel so sad that he sent for the minister in the place where the family used to live. He asked the minister to come and say a prayer beside his mother's grave.

so flüchtet gar mancher gern zur "Natur" zurück. Sie ist es, die alsdann einen festen Halt gegenüber willkürlichem und entartetem Treiben und Begehren liefern soll. So ist auch zu allen Zeiten versucht worden, dem positiv geordneten Rechte entgegen, das nur zu oft fehlerhaft und zufällig erschien, ein natürliches Recht zu entdecken, ein Recht, das "mit uns geboren ist."

### 獨文和譯 (哲學專攻科)

① Philosophieren ist Nachdenken, denkende Betrachtung der Dinge. Doch ist hiermit der Begriff der Philosophie noch nicht erschöpft. Denkend verhält sich der Mensch auch bei praktischen Thätigkeiten, bei denen er die Mittel zur Erreichung eines Zwecks berechnet; denkender Natur sind sämtliche andere Wissenschaften, auch die, die nicht zur Philosophie im engeren Sinne gehören. Wodurch unterscheidet sich nun die Philosophie von diesen Wissenschaften? Ihr Stoff ist ganz derselbe, wie derjenige der einzelnen empirischen Wissenschaften: Bau und Ordnung des Weltalls, Eigentum, Recht und Staat—all diese Begriffe und Materien gehören der Philosophie so gut an, als jenen besonderen Fachwissenschaften. Das Gegebene der Erfahrungswelt, die Wirklichkeit, ist der Inhalt auch der Philosophie. Nicht ihr Stoff ist es also, wodurch die Philosophie von den empirischen Wissenschaften unterscheidet, sondern die Form, ihre Methode, ihre Erkenntnisweise. Die einzelne Erfahrungswissenschaft nimmt ihren Stoff unmittelbar aus der Erfahrung auf, sie findet ihn vor und nimmt ihn so auf, wie sie ihn vorfindet; die Philosophie dagegen nimmt nirgends das Gegebene als Gegebenes auf sondern sie verfolgt es nielmehr bis zu seinen letzten Gründen, sie betrachtet alles Einzelne in Beziehung auf ein letztes Prinzip, als bedingtes Glied in der Totalität des Wissens, ..... kurz, die Philosophie betrachtet die Totalität des Empirischen in der Form eines gegliederten, gedankenmässigen Systems.

### 佛文和譯 (法律、政治、經濟、商業各科共通)

① Nos pères les Germains n' admettaient guère que des peines pécuniaires. Ces hommes guerriers et libres estimaient que leur sang ne devait être versé que les armes à la main. Les Japonais, au contraire, rejettent ces sortes de peines, Sous prétexte que les gens riches éluderaient la punition. Mais les gens riches ne craignent-ils pas de perdre leurs biens? Les peines pécuniaires ne peuvent-elles pas se proportionner aux fortunes? et, enfin, ne peut-on pas joindre l'infamie à ces peines?  
 ② Voilà la supériorité de la monnaie sur tout autre objet, même le plus précieux. C' est que celui qui possède de grandes richesses, collection

de tableaux, objets d'art, ne pourra s'en servir comme instruments d'échange qu' à la condition de les convertir préalablement en monnaie par la vente, de les réaliser, comme on dit, expression curieuse qui implique que la monnaie est, en fait de valeur, la seule réalité!

## 論 文

法と社會 (法律學科)

我國憲政の前途を論ず (政治學科)

國語の尊重 (英文學專攻科)

個人と社會 (哲學專攻科)

滿蒙と我國との經濟關係を論ず (經濟學科)

滿蒙は日本の生命線なり (商業學科)

## 大學豫科

### 英文和譯

- ① More has been added to the sum of human knowledge in most of the sciences during the first quarter of the twentieth century than in any whole century previous, and all of the sciences have been more quickly and extensively applied to daily life than ever before.
- ② The earlier it is definitely settled what a youth will become, the better it is for him. Those who have determined in boyhood what to make of themselves appear to have been eminently successful.
- ③ I like the English people better than the people of other countries I have visited; and the manners of the English gentlemen impress me as not unlike those of the Japanese samurai. Behind their formal coldness I can find friendship and kindness.

### 和文英譯

- ① 健康は富に優る。
- ② 飛行機が旅客を世界各地に運ぶの日が来るでせう。
- ③ 滿蒙は日本にとって所謂生命線である。此方面に對して我々は最善の努力をせねばならぬ。

### 代 數

- ①  $x^4 - 1$  が  $x^3 + px^2 + qx + r$  = で割り切り得ル時  $p, q, r$  を定メヨ。但シ  $p, q, r$  は實數トス。
- ②  $\frac{x^2 + y^2}{x^3 + y^3} = \frac{5}{9}$ ,  $x + y = 3$  ヲリ  $x, y$  を求メヨ。
- ③  $a, b$  ノ間ニ二ツノ等差中項ヲ挿入スレバ其等ノ中項ノ和ガ  $34a^2$  = 等シト云フ、 $a, b$  間ノ關係ヲ求ム。
- ④ 某電鐵ト某博覽會トガ乗車賃金及ビ入場料ノ連絡割引券ヲ發賣セントス。乗車區或 10 km

# 昭和七年度入學選拔試驗問題

## 學 部

### 外 國 語 (英獨佛語中一を選擇)

#### 英 文 和 譯 (法律學科)

Law is one of the elemental forces which rule the world. The leaders of mankind—founders of religions and empires, philosophers, successful generals, architects whose works are the admiration of all, men of science whose discoveries have transformed our conception of the universe—all these have, from time to time, appealed to Law as a justification or explanation of their beliefs or conduct. And although it is evident that these different persons use the term 'law' in widely different senses, yet there is a sufficient similarity in their language, and a sufficient likeness in the ways in which they deal with their subject, to lead us to think that, unconsciously, they are all appealing to the same fundamental idea or concept, though it is extraordinarily difficult to define exactly the nature of that idea or concept. And this belief is confirmed when we discover, as the work of travellers and anthropologists is increasingly enabling us to discover, that this idea or concept of Law is not confined to civilized peoples, but is to be found, though often in grotesque forms, in primitive communities.

#### 英 文 和 譯 (英文學專攻科)

- ① The word 'language' in its widest meaning is used to embrace every mode of communication by which facts can be suggested and made known, the sentiments or the passions expressed, or the emotions excited. In its most limited application and in the sense in which we generally use the term, language means human articulate or spoken speech. Our word language is derived from the Latin lingua, a tongue. But curiously enough it is not the tongue but the voice which plays the most important part in communication. Sounds are articulated or emitted from the throat, and words are formed not with the tongue alone, but with the help of the teeth, the lips and the palate.
- ② In Florence every citizen was obliged to belong to some one or other of the guilds and to keep up at least the appearance of carrying on a trade or craft. Thus we find that Dante was an apothecary. Then, as trade developed and prosperity increased, some families became very rich and soon discovered that wealth could be used to procure political power. This discovery quickly led to the establishment of a despotism—plutocracy became virtual monarchy, but since the monarch had to seize the power and to maintain it against

rivals when he had seized it, these states resembled the tyrannies of ancient Greece rather than the monarchies of modern times.

- ③ One might define Art as an expression, satisfying and abiding, of the zest of life. This is applicable to every form of Art devised by man, for, in his creative moment, whether he produce a great drama or carve a piece of foliage in wood, the artist is moved and inspired by supreme enjoyment of some aspect of the world about him; an enjoyment in itself keener than that experienced by another man, and intensified, prolonged, by the power—which comes to him we know not how—of recording it visible or audible form that emotion of rare vitality.

#### 英 文 和 譯 (經濟學科)

- ① As civilization progresses, man develops new wants, and new and more expensive ways of gratifying them. There seems to be no good reason for believing that we are anywhere near a stationary state in which there will be no new important wants to be satisfied; in which there will be no more room for profitably investing present effort in providing for the future; and in which the accumulation of wealth will cease to have any reward. The whole history of man shows that his wants expand with the growth of his wealth and knowledge. And with the growth of openings for the investment of capital there is a constant increase in that surplus of production over the necessities of life, which gives the power to save.
- ② In its simplest form money is a concrete medium of exchange, a thing which, owing to the customs of a people, anyone will readily accept as a medium, as something between the commodity he is ready to give in exchange, and the commodity he wishes to get in exchange, because he knows that every one else will accept it in the same way, so that he will be able to get what he wants by parting with it.

#### 獨文和譯 (法律、政治、經濟、商業各科共通)

- ① Die faulen Flecke, die den Geist und den Charakter der Japaner stark verunzieren, sind Eitelkeit, Mangel an Selbsterkenntnis, und ein noch grösserer an kritischem Vermögen. Diese schlimmen geistigen und sittlichen Gebrechen treten in besonders auffälliger und komischer Weise bei solchen Japanern hervor, die von dem Becher der abendländischen Wissenschaft und Kunst genippt haben.
- ② Wenn in einer entwickelten Kultur Schäden sich zeigen, wenn die bestehenden Zustände in vielen unbegreiflich oder auch nur allzu verwickelt werden,

關西大學學報創刊十周年記念

懸賞論文募集

- 一、應募資格  
本學部、大學豫科及び専門部學生に限る
- 二、論文種別  
法律、政治、經濟、商業、文學に關する學術論文に限り、文藝作品、時事問題批評等は採らさ
- 三、論文分量  
四百字詰原稿紙二十枚以内
- 四、締切期日  
昭和七年六月十日
- 五、審査表  
種別に從ひ夫々専門教授に委嘱す
- 六、發表  
審査の結果は昭和七年七月十五日發行の本誌上に於て發表す
- 七、入選者  
論文の優秀なるもの五篇を選び賞金を授與す。尙入選論文は順次本誌上に掲載す
- 八、送稿先  
右締切期日までに到着するやう關西大學學報局宛郵送又は持參のこと封皮には「懸賞應募」と朱書するを要す
- 九、備考  
イ、文體は隨意なるも假名は平假名を用ひ墨又はインクにて明瞭に記載すること  
ロ、原稿には必ず論題及び應募者の部、科、學年別並に氏名を明記すること

昭和七年五月

關西大學學報局

千里山俳壇 朝冷選

專法一 相澤 正二

公園にパラソル二三若葉哉  
五月鯉の空を喜ぶ子供哉

專商一 平井 湖村

那山にて  
雪洞に吹き入る花の吹雪哉

菖蒲ヶ池にて  
人酔ふて罵り合へる花見哉

追加 朝 冷

田螺取爪をいためて草を巻く

秋千や桃李の風を憚ま  
長閑さや東籬の下に土弄り  
山藤に巖角雨をしぶかせぬ  
哥磨の繪に見る春の潮哉

三月廿七日天齋宮にて宗  
因か二百五十年忌を修す  
浪花津に残るこの花梅翁忌

當季雜誌募集  
□封皮には必ず「千里山俳句」と朱記の事  
□送稿先  
大阪(東淀川局)十三東町三丁目  
牡丹書房 有田朝冷

編輯餘録

▼五月です。新緑更に蒼々、蛺蝶徒らに殘紅を逐ふて牆間を過ぐるも五月です。  
▼本誌も来る六月十五日發行の分を以て創刊まきに十周年、いよいよ百號を迎へんとして居りますので、目下これが準備に忙殺されてゐます。

▼上掲の如く創刊十周年記念の懸賞論文は六月十日に締切りますから、在學生諸君は奮つて應募して下さい。十周年記念の事業としては懸賞論文の外にも種々計畫中でありますが、未だ確定にいたりませんのでそれらの發表は次號にいたします。

大正十一年六月十五日創刊  
昭和七年五月十三日印刷  
昭和七年五月十五日發行

不許製 編輯兼 遠 藤 銀  
發行人 谷 口 春 雄  
印刷所 谷 口 印刷所  
發行所 關西大學學報局

大阪市東淀川區長柄中道  
天六學舎 關西大學  
電話 堀川 一〇三三  
五〇三九  
振替 大阪 二六七五〇〇  
大阪市外 千里山  
千里山學舎 關西大學  
電話 吹田 一三三

御一報次直に參上  
委細御相談申上す

家庭、會社、持出、園遊會  
艦船進水式、模擬店、新築  
落成式設備、設計、裝飾

御宴會は

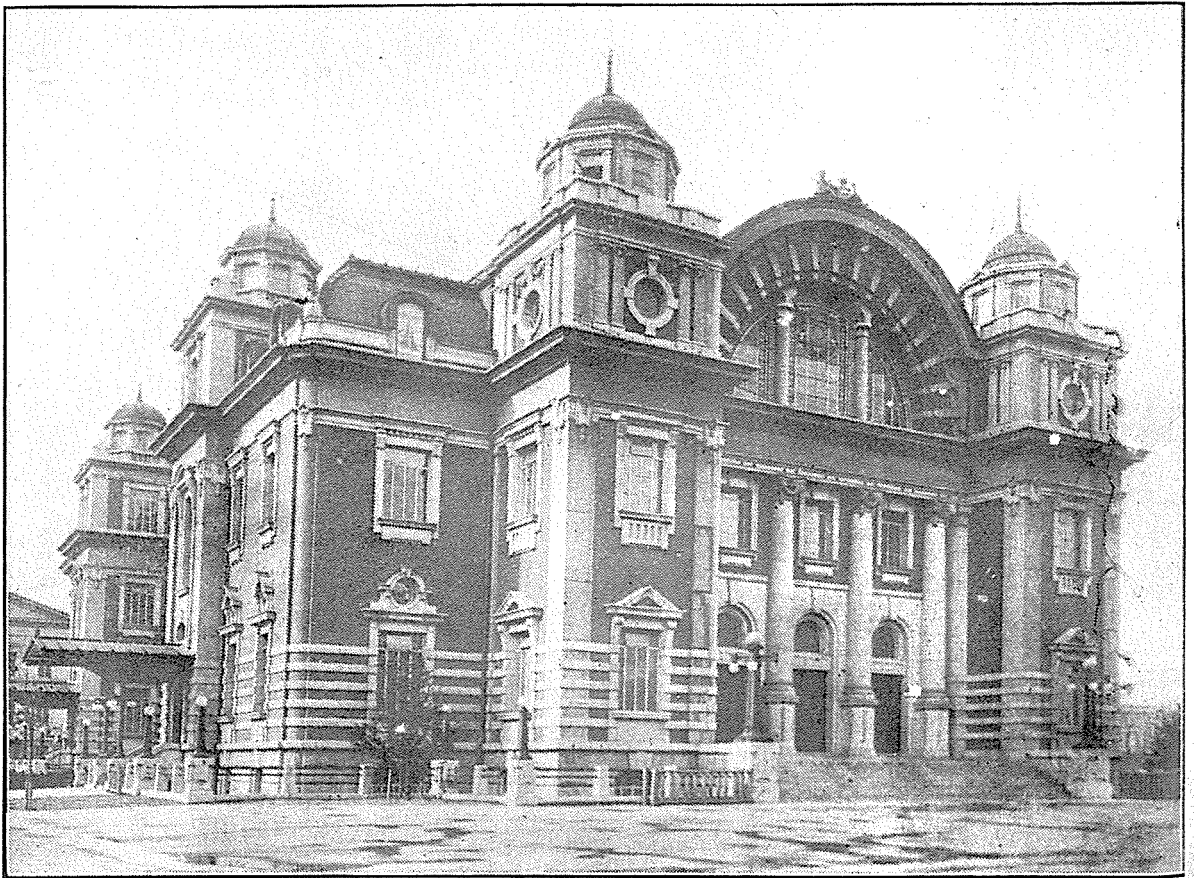
西洋料理、日本料理いづ  
れの料理でも大小に拘ら  
ず御満足の行くやう努力  
いたします。

# 大洋軒

電話本局 二二二二番

營業所

中央公會堂  
大阪銀行俱樂部  
天王寺區役所  
友和俱樂部  
千代山關西大學  
東支店 幸樂



P. O. D. の眞價を知るものは A. O. D. も備へよ

# AMERICAN OXFORD DICTIONARY

COMPILED BY

F. G. FOWLER & H. W. FOWLER

AMERICAN EDITION

REVISED BY

GEORGE VAN SANTVOORD

Cr. 8vo. pp. 1023

¥ 2,90

絶對權威ある三省堂の辭書

Sanseido's New Concise

Japanese-English Dictionary ¥ 2.50

Sanseido's New Concise

English-Japanese Dictionary ¥ 2.50

Sanseido's-Collège

Japanese-English Dictionary ¥ 3.20

三省堂の最新刊書御購讀を!

Neue Deutsche Grammatik

von

T. Sekiguchi

(新獨逸語文法教程)

關口存男編 ¥ 2.30

株式會社

## 三省堂大阪支店

大阪市西區阿波座下通二丁目六番地  
電話新町 539 振替口座大阪 81300